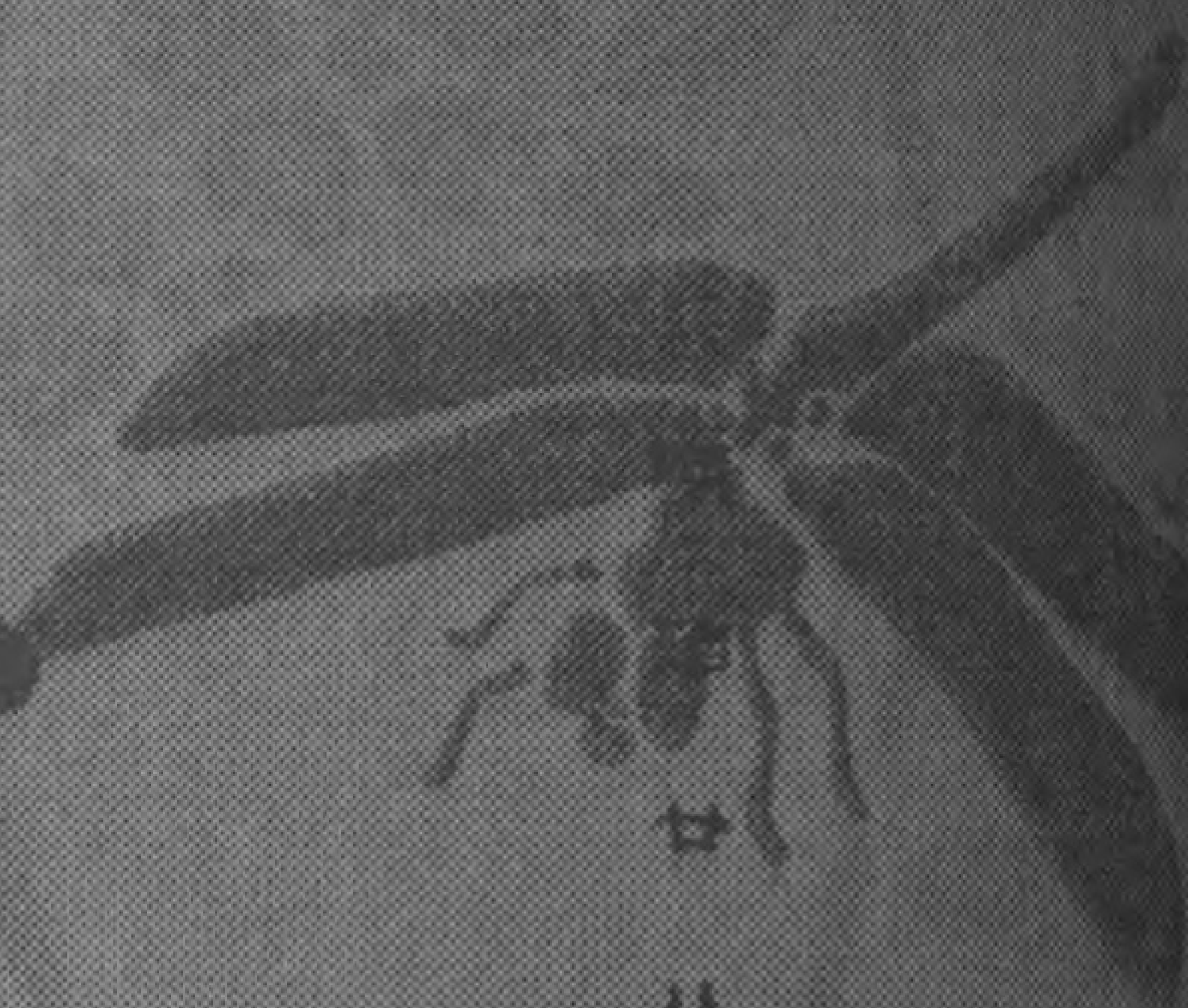
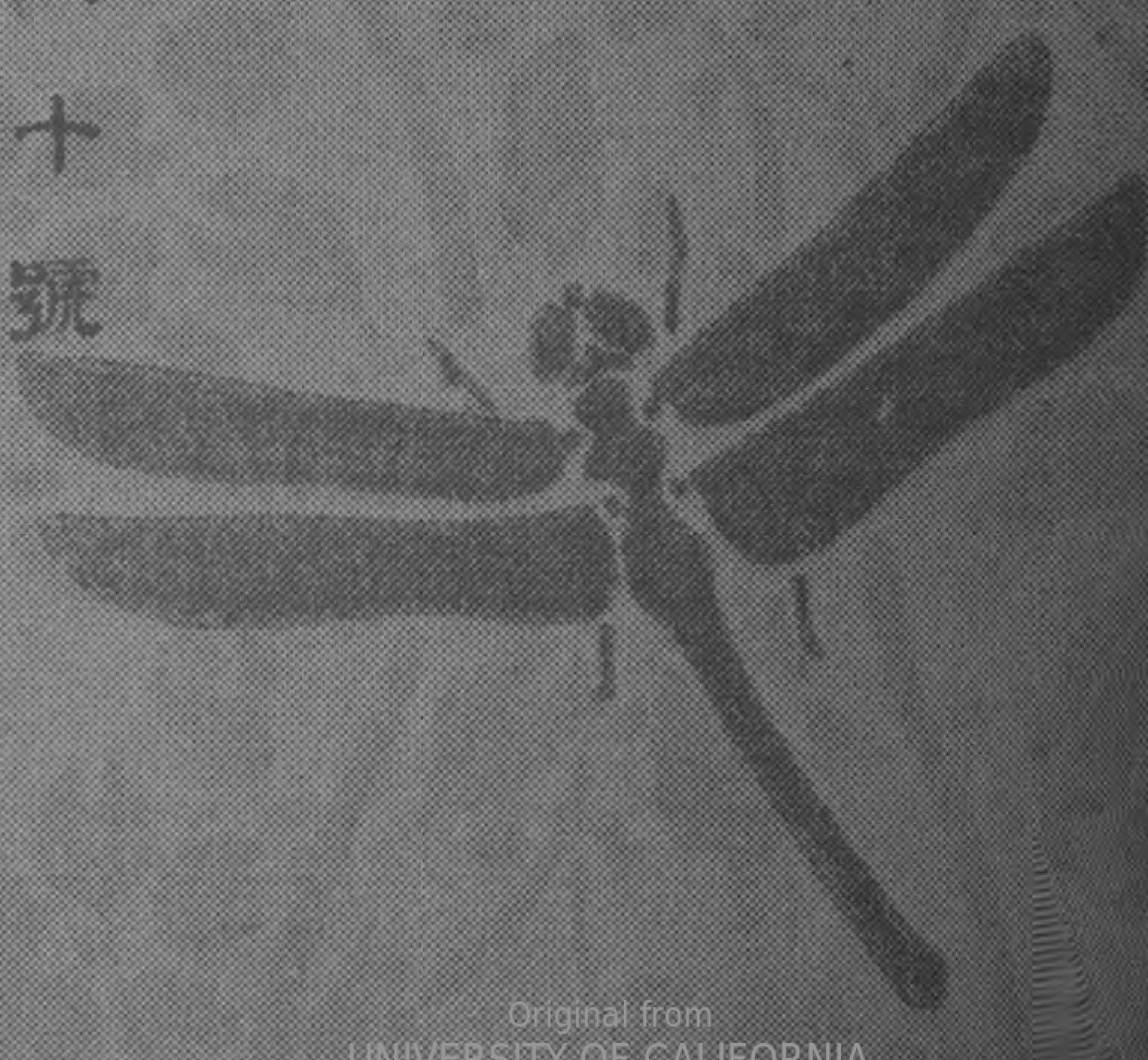
廿八年二月十四日發行



女鑑



第八十號



東京國光社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女鑑第八十號目次

Digitized by Google

紫式部



Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女鑑 第八十號

女鑑の任務

我が女鑑の國家に對する任務は、固より、重大なることと、論を待たざる所なりと雖、今日の世態と、女學界の實況とを察する時は、更に、一層、本誌の、婦女子に對する任務の重大を加ふるを見るなり。

何に由りてか然る。曰はく、請ふ詳に、之を左に述べん。

前年來、女學に關する雜誌の世に出づるもの、比々として續出せり。其の中、女學雜誌、貴女の友、婦女雜誌の如きは、稍、其の著るしきものなり。然れども、本誌が其の表に立ちて、特に、日本固有の婦德を發作長養せんことを務め、世の汚

俗弊風を蕩滌せんと期するもの、年既に久し。而して、世局の流移と共に、貴女の友は廢刊し、女學雜誌は、其の發兌の回數を減じ、婦女雜誌も、亦廢せり。獨我が女鑑のみ、儼然として屹立し、松柏の操、梅竹の節を持し、斯の道の旺盛を扶翼し、清淑芳潔の婦德を養成し、以て、國家に對するの大任務を盡くさんとするなり。

今日、本誌にして、苟、其の務を怠らば、天下の婦女子をして、全く、其の耳目を失はしめざるべからず。是に於てか、本誌の任務は、愈、其の重大を加ふを謂ふべし。

本誌の任務既に斯の如く大なり、故に、本誌が將來の方針も、亦、最、鞏固不變にして、愈、益、此の幾千萬年來不渝の婦德の美をして、億万斯年に至るまで、

窮極敗壊の患なからしめんとするなり。

世人、或は言はん。本誌に、斬新の意匠なく、又、奇抜の議論なしと。是、則、本誌の、敢て世風を逐はず、時好に投せざる所以にして、決して、迂陋、自甘んずるに非ず、爲すに忍びざるものあればなり。

茫々たる覆載の間に、大日本帝國ありて、既に、仁風を宇内に洽及せしめたり。而して、此の帝國の中にありて、本誌、既に、婦女子の耳目となり、楷範となる。神州純美の婦德をして、宇内に、宣揚流化せしむるもの、將に之よりして始らんとす。是、豈、大に奮勵して、之を發揮せざるべけんや。

吾人は、國運の隆昌を無窮に維持するを以て、畢生の本務とせり。故に、之が爲には、粉骨虀身すとも、敢て辭せず。世人、若、深く、今日の世態に鑑みて、而

して、本誌の抱負する所を見ば、必、吾人の言の、誇言にあらずして、將來に於いて、其の實効の大なるものあるを見るべきなり。

論説

小天地

坂本三七郎

方丈の室、狹しと謂ふこと莫れ。婦女生涯の天地は、此間に在り。家政育兒の事、輕視する莫れ。女子一生の本務は、之を遂ぐれば足れり。男子は、生れて世界を以て天地とし、女子は一家を以て天地とす。一家の小天地、狹隘膝を容るゝの地なきか如しと雖、一家の盛衰一國の興亡、悉、此中より現はれ來る。而して、之が命運を左右する者は誰ぞ。纎々たる蒲質柳性の、一婦女子の操縱に

あり。彼の英雄が、世界を驚破したる、學者が千古の理想を說き出したる、技術家に工藝、宗敎に、世を救ひ、國を益したる者、誰か、孃等の愛育を受けざらん。夜寒うして、呱々として泣き、懷裡乳を求めて、嬉々として笑ふ。一泣一笑、皆、是、慈母春風の愛情にあらざらんや。異日は英雄たり、豚犬たり、賢たると、愚たると、婦女子敎養の如何に由らざるなし。一家の小天地、眞に、天下を掩ふの潛勢窟なり。故に、一國の隆盛は、此等婦女子に、十分愛國心ありて、始めて、希ふべし。婦人女子、其行は貞淑にあれ。又、婉順にあれ。然れども、其心は卑屈なる莫れ。自棄する莫れ。一家の主宰は、是、社會を支配する、神通靈妙の天使神人なるぞ。

婦女子の、情に濃なるは性なり。涙に脆きも、亦、性なり。此情なり、涙なり、吾

人は、之を灑ぐの地を得んことを願ふ。一樣の春雨、花を養ふの膏雨たれ。落花悲風の雨たるを欲せず。娼婦妓女が、癡情に泣くの涙も、貞女烈婦が節に哭し、義に泣くも、其泣聲涙痕は一なり。小楠公母の涙は、南朝天子を保護する、江河深講となりしにあらずや。西施の艶涙情波は、呉王宮裏に、亡國の雨となりしにあらずや。

嗚呼、同一の情波涙痕、一は國を存して、一は之を亡ぼす。恨むべき情か。恐るべき涙か。吾人は、世の婦女子が、多く、涙を灑ぐべき地を失へるを歎ず。一家の小天地、情の七分は婦女子に與へ、三分は男子に與ふ。七分の情、十分の涙、雛鳳麟兒を養ふ母の羽翼にぞある。昔、孔丘、女子と小人とは養ひ難しと説り。彼は、女性の情涙が濁れるを見て、清るを見ず。其激動を惡みて、靜渟を知らず。

孔丘も、亦、女子を奴隷物件視したる陋見を免れざる者と云ふべし。

吾人は、甚、當世女學生一派の風儀を惡む者なり。否、其容姿を惡み、言語を惡み、併せて、其擧動を、最、厭諱する者なり。螺髻の髮、十日梳らず。服裝、普通の女流に擬せず。面に羞容なく、貌に婉雅の態なし。何等の容姿ぞ。淺薄の學に誇りて、喋々談論し、些の、女性謙讓の語なし。何等の言語ぞ。其平居日常の擧動に至りては、吾人、之を口にするを惡む者多し。學を修め藝を學ぶ、徒に、彼の人の子を賊ふに過ぎず。此の如きの女流は、吾人の唱ふる所の至誠の情、多愛の涙、一家天使の保護者、天下盛衰の潜勢力なる者は、果して、これ有る乎。育兒の法知らざるにあらず。家政の道、敎を受けざるにあらず。此を學びて彼を忘れ、末流を淸うせんと欲して、其源泉を涸す。女大學流の女子に劣るヿ遠

し。嗚呼、情薄うして涙少なし。春雨花を養ふ力なくして、秋風冬雨一時に來る。家中の天地、寂寞慘憺、稚兒寒に泣いて、良夫をして、內顧の患あらしむる者は、果して、誰の罪ぞや。是、女鑑の、時流に逆うて起る所以よして、吾人が、之に贊同する所以なるを知れ。

從來、日本の婦女子が、世に稱せられたる所以の者は、其容貌の美なるが爲にあらず。亦、才學の高きにあらず。其交際場裡の女王たるが爲に非ず。心高潔にして婉雅、溫柔にして貞節、是、本邦婦女子の資性となす。竹外一枝の梅、清流に臨むが如く、玉池芙蓉の亭々たるが如きは、則、然り。薔薇の紅白亂れ咲き、野花亂叢の芳は、吾人、其秀を知らず。故に、日本の婦女子は、平居、一家天地の間に在りては、仰事俯育情濃に愛極る。一朝事に臨めば凛として奪ふべか

らざる九寸五分の懷劒の如くあれ。此の如くにして、大和撫子の色深く、其天性、全く養ひ得たりと云ふべし。

それ、此の如く、吾人が望む所の者は、社會の基礎を鞏うせんことを欲し、潜勢力の盛ならんことを希ふ。決して、彼の佛の女傑汝安の如き、身を挺でゝ國難に殉じ、士卒に先だちて陣を斬るが如き、雄猛なる行爲を願はず。願くは、國家難あり、天下事あるの日には、至誠の情、多愛の涙を以て、夫の前に泣け、兒の心に注げ。一片の情波、夫は義に激し、一點の涙痕、兒は起ちて舞はむ。是、婦女子が國家に及ぼす至大の勢力を有する所以なり。吾人が情は、益〻濃なるを要し、涙は愈〻多からんを願ひ、而して、又、之を灑ぐの地を得んことを敎ふる所以なり。美人薄命の涙、才子輕薄の情、嗚呼、徒に、國家社會の風紀を破るの涙

波情流たらんのみ。愼まざるべけんや。
吾人は、之を歴史に觀る。希臘「スパルタ」の婦女、其子の軍に從ふや、之を門に送りて曰く、汝功名を成して歸るに非ざれば、楯に載りて歸れと。其兒、劍の短を母に訴ふ。叱して曰く、汝の歩を進めよと。何等の贈言ぞ。何等の警語ぞ。婦人且然り。當時「スパルタ」の富强なりし、誠に故ありと謂ふべし。「スパルタ」婦人は、豈、何ぞ、情涙なからんや。唯、氣激し、意壯なるの時、情結びて涙凝る。結情凝涙は、却りて、是、千重の情波、万點の紅涙、夫を勵まし、兒を戒しむる極點にぞある。今や、征淸の軍起りて、壯士烈夫、雪漠の野に轉戰す。貞婦征人を慕うて、空閨愁雨多く、慈母愛子を懷うて鬢髮白を添ふ。然れども、知らずや、平壤に、黃海に、旅順に、功成りて國威揚るは、嗚呼、卿等が門に送り

て、多情激勵の涙、與りて功を成せるを。凱旋門を築きて、卿等が愛子戀夫を歡迎するは、日ならずして來らむ。待たん哉。待たん哉。之を送るに涙を以てし、之を迎ふるに涙を以てす。多情なる哉。多涙なる哉。天使の情涙願くは、吾人に一掬を與へんか、以て、滿天下の、癡情涙なき女流を警醒せん。小天地情涙の一篇を草す。讀者、以て如何となす。

德川時代女子敎育史評論（十三）

岡崎遠光

三、同時代の敎育家、及、敎科書。（はじめ）

回顧すれば、殆、三百年の昔、德川家康公、武を以て、天下の紛亂を靜め、文を以て、泰平に復せんとするや、彼れが、よりて、以て、賴むべしとなしたるは、學

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

者なりき。而して、當時の學者は、中古の積學の如く、巧に文を作り、妙に筆を弄すること能はざりしを以て、隨ひて、文學、敎育等の事業は、尚、甚、幼稚なりき。たゞ、家康公、不世出の才は、單に學術に心ざしたるのみにあらずして、又、書籍の刊行を促したり。是、實に、兵收まりて後、暫時にして、文學、敎育等の事業が、其の嫩芽をあらはし、古學、史學、歌學、心學、及、美文學等が、各、其の歩武を進めて、元祿の花を造りたる源因なり。

さて、元祿以前、女子敎育家を以て聞え、其の著書の、今、なほ、殘りて、少くとも、當時の敎育主義を、吾人に敎ふる人々は、中村惕齋、貝原益軒の兩先生なり。其の後、女子の敎科書を著述し、自、その敎育家を以て、任ぜし人々は、高井蘭山、井澤長秀、香月啓益、藤井懶齋、手島堵庵を首として、其の數、少しと

せず。熊澤蕃山先生は、經世の才ありしを以て、國家の大事に着眼する傍、女子訓、女子訓或問の二著述あり。松平樂翁公は、其の夫人の爲にとて作れる難波江、及び樂亭かんな筆記の二稿あり。佐久間象山、亦『女訓』を述べたり。啻に、男子のみならず、女子中にも、また、其の同性の爲に、言行上の摸範となるべき敎訓書を公にせるものあり。即、芳菊軒の母某は、賢女物語五卷を著して、自、當時女流の惡風を改良せんと試みたりき。又、藤堂嵐子の藻鹽草、伎都女の校補に係る女誡一重衣等は、其の書、たとひ、大に流行せしものにあらずと雖、亦、女子教育家の觀念一端を觀察するに餘あり。

予は、今、家康公、天下の太政を攝してより、下りて、慶應の末に至るまでに、現れたる各女子教育家の主義、並に教科書等を、論述せんとするにあたり、先、

其の時代を分割して、五期となすべし。而して、期毎に、その時、專、流行し、若くは、刊行せし教科書に就きて、管明なる、評釋を加へんと欲す。その時代、及、教科書は、左の如し。

○第一期　德川家康公攝政の始より紀元二千三百十七年まで

一、姫鑑　全十六册

一、女四書　全七册

一、本朝烈女傳　全十册

○第二期　紀元二千三百十八年より紀元二千三百七十年まで

一、女大學　全一册

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一、大和小學　○

一、和俗童子訓　○

一、女童子訓教草　全四册

一、女子訓　○

一、女子訓或問　○

一、女重寶記　全五册

一、女重寶記大成　全一册

一、女用訓蒙圖彙　全一册

一、いなご草　全二册

一、藏笥百首　全六册

一、江戸大節用海内藏　全一册

一、百人一首抄　全三册

一、女訓抄　全二册

一、婦人養草　全十册

一、鑑草　全六册

○第三期紀元二千三百七十一年より紀元二千四百二十三年まで

一、女孝經　全一册

一、賢女物語　全五册

一、大和女訓　○

一、女訓みさご草　全一冊

一、婦人壽草　全六冊

一、小兒育草　全五冊

一、幼女實訓 女朗詠教訓歌　全一冊

一、女手習教訓の書　全一冊

一、女中道しるへ　全四冊

一、藻鹽草　全一冊

○第四期紀元二千四百二十四年より紀元二千四百七十七年まで

一、女今川　全一冊

一、女今川姫小松　全一冊
一、女用文寶箱　全一冊
一、女用文袖硯　○
一、女用文初音錦　全一冊
一、文化女用文章　全一冊
一、女書狀箱　全一冊
一、女筆色綠　全三冊
一、増補日用女重寶記　全五冊
一、女用事業草　全二冊
一、明良婦人心得草　全一冊

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一、當世操車　全五冊
一、男子女子前訓　全一冊
一、女訓三才圖繪　全一冊
一、神國女訓抄　全二冊
一、女誡一重衣　全一冊
一、女學範　○
一、女年中往來眞珠海　全一冊
一、女書札百花香　全一冊
一、女花鳥餘情　全一冊
一、伊勢物語女要袋　全一冊

一、女九々の聲　全一册
一、難波江　全一册
一、樂亭かんな筆記　全一册

○第五期紀元二千四百七十八年より紀元二千五百十七年まで

一、女今川繪畫　○
一、女今川雲井の鶴　○
一、女今川操鑑　○
一、女今川和歌綠　全一册
一、女今川寳藏　全一册

一、女今川千代見種　全一冊

一、長雄女今川　全一冊

一、增補女大學寶箱　全一冊

一、女大學教草　全一冊

一、女大學寶文庫　全一冊

一、女小學　全一冊

一、女中庸瑪瑙箱　○

一、女訓手習鏡　○

一、女訓孝經教壽　全一冊

一、女訓　全一冊

一、女庭訓　全一冊

一、女前訓躾種　全一冊

一、女教訓千代の鶴　○

一、女教訓書操鑑　○

一、女實語教　全一冊

一、三教童喩　全一冊

一、女消息往來　全一冊

一、女用文章　全一冊

一、女新用文章　○

一、女手習狀　○

一、女用文章指南車　○

一、御家女用文寶箱　全一册

一、女用文艶詞　○

一、女用文增鏡　全一册

一、增補女諸用文章　全一册

一、女用文章　全一册

一、女雅俗要文　全一册

一、女文會百家選　全一册

一、女たしなみ草　○

一、倭百人一首玉柏　○

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一、万寶百人一首小倉錦　全一冊
一、錦花百人一首　全一冊
一、錦葉百人一首小倉栞　全一冊
一、錦森百人一首萬寶鑑　全一冊
一、初心假名遣　○
一、訓蒙圖彙　○
一、女藝文三才圖會　○
一、女四書藝文圖會　○
一、女筆花鳥文庫　全一冊
一、女年中祝事の始　○

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一、全用智惠鑑　○

一、老婆心書　全二冊

一、小兒必用記　○

一期は、大抵、半世紀なり。著者の名は、各書を評論する際に述べんとて、こゝには記さず。又、右の外、全國一般に流行して、時の女子社會を支配せし書は、藤井懶齋の女萬寶操鑑を首として、和論語、和爾雅、和漢事始、續女則、百姓往來、商賣往來、世話字往來、風月往來、東海道往來、女國づくし、本朝二十四孝等。

是等の古書は、予が、略、閲讀せしものなれど、いまだ、見聞せざる典籍も、亦、甚、多數なるべし。得るに隨ひて加へてん。　（未完）

女子處世論

三輪田眞佐子

第十五　迷の心を去りて常道を歩むべし

蒼々たる山、遠く、これを望めば、おのづからなる傾斜はあらむも、さまで、凹凸なきが如し。渺茫たる海、遙にこれを眺めば、高く天外に連り、少も、浪濤なきが如し。されど、如何なる山も、これを近けば、必、凹凸多くして、容易に登るべからず。如何なる海も、これに、棹せば、必、波濤躍りて、動搖なき能はず。蓋、人生も、亦、斯の如し。則、他人の苗より、秀づと思ひ、他人の庭の光景は、自分の園の風景よりも、美に見ゆるのみならず、總て、空想上の計畫は、無限に、増長し得んをもて、遂に、他人の境遇を羨み、自分もかくもがなと、願ふなど、愈々、達し得がたき虚望に迷ふめり。あはれ、人を誤るものは、遠望

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なるかな、外見なるかな。

凡、人の、一身を誤りし源を尋ぬれば、かゝる、迷より發すること、多ければ、處世の道を知らんと願ふもの、思はざるべからず。この故にや、をちこち、吾、學校にありしとき、異日、かゝる良人にまみえ、かゝる家政を作らむとの、空想にのみ心を馳せて、恒に、教師の訓にあかぬ心地せしが、今日實際の世路を歩むに至り。今更、前日の空想をうらむばかりなりなど、いひ越す人、少からず。おのれ、かゝる、不愉快らしきことを、諸孃に、つぐる所以のものは、固、無責任の放言をなして、徒に、筆舌を弄するを、好まざれはこそ。むかし、小野小町は、名聲ならびなく、衣には、五綵の錦繡を重ね、口には、和歌を詠じて、數多の男子を輕しめ。女、御后に、心かけたりしほどに、あはれ、彼

か、父母昆弟に離れ、いみじきさかえ、日々に衰へ。花美なる容、年々に、すたれ、遂に破れて、月さへもる﹅家にすみ。荒れて、蓬のみしげれる庭に立つ、無頼の人になりにけりと、古書に見ゆ。これなん、空望を懷きしとがめなりける。そも〳〵、身を、百道有益に、處する人こそ、尊けれ。然るに、世に、故なうして、終生孤存を期し、あるは、徒に、遁世して、浮世を去らむとする、女子あるは、誤ならんかし。但、一身に孤存することの、止むを得ざる事情ある女子は、例外ならんも、良人の、冥福を、祈らんための赤心より。遁世する女子すら、貞操の德を守りつゝ、勉勤して、なき人の、家名を維持する婦には、及ばざること遠し。唯、かゝる女子は、憐むべきものとこそ言べけれ。要するに、孤存して、天理に背くもの、あるは、遁世して、無益の生活をなす人は、有道有益に世を經

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し、人に及ばざること、天淵の差あり。今、實例を以て、之を區別せん。彼の、正成の妻は、良人の、戰死を聞きしとき、身を誤らで、返りて、正行の死せんとするを、止め。父の、汝を、遺せしは、恩愛のためにあらず。異日、叡慮を安じ奉らむためにあらずやと、敎訓せしを以て、有道有益の婦人なり。彼の、北村季吟に從ひて、國詩を學びて、名高き田捨女が、良人の死するとき、

秋風のふきくるからにいとやなぎ
心ぼそくもちるゆふべかな

と、詠じて、忽、髮を剃り、尼となり、妙融と云うて、生涯を終へしは、亦、一種の淸き婦人なれど、正行の母には及ばざること遠し。これに反し、都督長史、高成章なる人の、長女に、妙法なる女子ありけり。その齡、二十になりしをも

て、父母、嫁をすゝむるとき、直に、髪を斷ちて、固辭せしかば、或人、いひけらく、そは、幸にあらじと、そのとき、妙法、妾、聞く、三室に歸する者は、二親に逆ふとも、不幸とならずと、答へきとや。誠に、かゝる女子は、その才能、如何に秀づるとも、女子たる天倫に背き、且、世を、無益に過すものなれば、豈、賞すべきものかは。

古人、いふやう、君子は、思ふこと、その位を出でずと。信に、女子たるものは、その、天倫を守り、分限に從ふべきなり。元來、女子は、學ぶこと深きに至らば、勢、平凡なる人を、夫とするを欲せずなど、權衡上の關係より、本意ならずども、獨立をなさゞるを得ざることも起らむ。されど、始より、獨立生存を期する人は、天道に背くのみならず、なほ、遠望外見の迷に、基くものなれば。

その、結果は、必、不幸ならん。その、他、尊くして、賤者の生活を慕ひ、賤うして、尊者の位置を羨む人、あるは、年若きとき、年老ゆる曉には、反りて、安心ならむなど、空想に迷ふ、女子、決して少からず。必竟、自由結婚、あるは、獨立生存を撰び、あるは、徒に、自分の境遇を改め、職務を變ぜんとする女子は、空想の迷に外ならず。唯、虚心よして、常道を歩む人は、幸福なり。希くは、かゝる、空想の夢さめざる女子は、蒼々たる山に登れ。渺望たる海を渡れ。されば、おのづから、悟ること多からん。

史談

紫式部

大町桂月

容貌すぐれて、文學めでたき人は、いと、稀なり。まして、婦徳をも、兼ね備へたる人は、古今東西の史上に絶えてなくして、わづかに、我國に於て、唯、一人を得たり。そは、かをり、いと、ゆかしき紫式部これなり。そのものせる源氏物語は、まことに、空前絶後の一大著述にして、萬代につたはりて、永く、日月と共に光輝を爭ふに足る。我國にて、古來、最も傑出したる文學者を數へ來て、余は、四人を得たり。柿本人丸、紫式部、近松門左衛門、瀧澤馬琴これなり。紫式部が女流の身を以て、かゝる大著述をなしたるは、日本女子の爲に、氣焔を吐きたるのみならず。日本帝國の名譽たらずんぞあらず。況、その容貌の花の如くうるはしきをや。況んや、その徳行の山よりも高きをや。欽慕の餘、玆に、安藤爲章の著はせる紫家七論を參考して、紫式部の傳をものしぬ。

紫式部は、藤原冬嗣の後裔なり。冬嗣の第六子に、良門といふ人ありけり。これよ

り、利基、兼輔、雅正の三代を經て爲時にいたりぬ。爲時に四子あり。長を惟規と云ひ、次を惟通と云ひ、その次を定暹と云ふ。末は女子にして、紫式部、即、是なり。

紫式部の父は、實に越前守爲時なり。母は常陸介爲信が女なり。爲時は、菅原文時卿の弟子にして、有名なる學者なりけり。又歌をよくして、その歌、敕選の集に入れり。父、已に、かゝる學者なり。紫式部の、幼時、如何に敎育せられしやは、おほかたは、推測せられ得べし。紫式部日記にいはく、

このかみ、式部丞（即、紫式部の兄、惟規）といふ人の童にて、史記といふ書、讀み侍りしとき、きゝならひつゝ、かの人は、遲うよみとり、忘るゝ所をも、あやしきまでぞ、敏く侍りしかバ、ふみに心入りたる親は、口惜う、男子にて、持たらぬこそ、幸福なかりけりとぞ、常に歎れはべりし。

この一節を讀まゝ、如何に、紫式部が幼時、既に天才をそなへて、聰明英明なりしかを知るべし。爲時は一世の學者なれバ、よく、その子を敎へて、己の衣鉢を傳へむとせり。是を以て、最、熱心に、その子惟規を敎へけるに、その末、いまだ覺り得ざる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ほど、紫式部は、傍聽しながら、早くも、覺え込み、その忘れし所をも忘れずして、記誦せしかば、爲時は、いたく、驚きて、此幼女にして、男ならば、我家聲を上げむものをとて、歎息せしなり。かく、男子にして、しかも、紫式部よりは、年遙に長じたれど、その學才、遙に、その下にありし惟規も、決して、凡人にあらず。彼、また、歌をよくして、その歌、多く、後拾遺以後の選集に入りたる人なり。是に於て、益、紫式部の才の、非凡なりしを知るべきなり。

紫式部が家庭にありしほどは、絲竹管絃、裁縫のわざ、云へば更なり。日本紀をはじめ、數多の物語より、史記、白氏文集に至るまで、和漢古今の書をよみならひけるに、所謂、一を聞て、十を知るの才ありければ、何事も、人にすぐれて、めでたかりけり。ことに、歌に長じ、文に長じ、管絃に長じたり。年長にて、藤原宣孝に嫁しけるが、不幸にも、宣孝は、病にかゝりて、早世せり。時に、長保二年四月二十五日なりき。その寡居して、未、宮仕せざりしほど、かの有名なる源氏物語は成りぬ。

紫式部の著はせる書、二あり。一は、源氏物語にして、一は、紫式部日記なり。此

二書の世にすぐれたることは、今更、いふまでもなし。そのあらましをいへば、紫式部日記は、その上東門院に仕へしほどの日記にして、見たるまゝ、思ふまゝ、別に思を搆ふることなく、書き流したるものなれど、文章、いと、優美にして、誦するに足るべきに、當時の儀式風俗をさへ、考證するに足り、又、紫式部の人となりをも知るに足るべき良書なり。源氏物語、一部五十四篇の大作にいたりては、まことに、和文の精粹にして、文章は更なり、意匠も、亦、遠く、他の物語に出傑して、後世の學者にもてはやされ、世既に定論あれば、余の辨を待ざれども、その中には、みだりがはしき所もなきにならねば、その爲に、源氏物語を屑とせざる人あり。それは、紫式部の眞意を知らざるの偏説なり。唯、勸善の小説ありて、懲惡の小説あることを知らざるの僻論なり。唯、理想小説ありて、寫實小説あることを知らざるの謬見なり。源氏物語の中には、實に、人倫を亂りたる所あり。それは、惡を懲さむとするなり。當時の社會の實を寫して、世を諷戒せむとするなり。德行高く、且、また、極めて、謙讓なりし紫式部の、しかも、極めて、優美なる筆を驅りて、かゝる節々を寫さしめたるは、げに、當時の事勢の然らしめたる所なりけり。

源氏物語は、まことに、古來未曾有の大著述なり。而して、一女子の手になれり。故に、人、或は、容易に之を信せず。或は、父爲時の意匠になれりと云ひ、或は、道長の加筆ありたりといふ。これ、みな、無根の虚説なり。甚しきにいたりては、此物語の非凡なるに驚くの餘、人力のみの能くする所にあらず、佛の冥助を受けたりなど、附會の説を逞うするものさへありけり。河海抄といふ書にいはく、
西宮左大臣、安和二年、大宰權帥に左遷せられ給ひしかば、藤式部、をさなきよりなれ奉りて、おもひなげく比、大齋院より、上東門院へ、めづらかなる草子や侍るとたづね申させ給ひけるに、うつぼ、竹取やうの物語は、めなれたれば、あたらしく、作り出して、奉るべきよし、式部に仰せられければ、石山寺に通夜して、この事を祈り申しけるに、をりしも、八月十五夜の月、湖水にうつりて、心のすみわたれるまゝに、物語の風情、そらにうかびけるを、忘れぬ先にとて、佛前にありける大盤若の料紙を、本尊に申しうけて、まづ、須磨、明石の兩卷をかきはじめけり。これによりて、すまの卷に、こよひは、十五夜なりけりとおぼしいでゝとは、侍るとかや。後、罪障懺悔の爲に、般若一部六百

巻を、みづから。書きて、奉納しける、云々。

これ、佛の助ありたればこそ、かゝる非凡なる大著述をも、爲し遂げたれとて、人を瞞す、例の浮屠氏の狡猾手段たるに過ぎず。されど、後世の識なき人、往々、此說を妄信して、紫式部は石山寺にこもりて、源氏物語をものせりなど、云ひはやして、之を圖畫にゑがくは、大なるひがごとなり。源氏物語は、夫死したるの後、田園に閑居して、心やりに作りたるものなり。紫式部が、爲時の助を假らず、道長の助をからず、佛の助を假らず、且、別に思をも凝らさずして、書き流したりといふ。紫式部日記を見るに、源氏物語と同一の筆法ありて、兩書共に、同人の筆になりしこそ、疑ふべくもあらず。紫式部、既に此筆力あり。爭でか、源氏物語をものし得ざらむ。かく、他の力ありたりと云はれしこそ、人をして、恐くは、眇々たる巾幗者流の作のみにあらざらむと思はしめたるまでに、この物語の非凡なりしことは知らるれ。

紫式部の才學德操、世にかくれずして、遂に、上東門院の宮に召し出されぬ。そは、寛弘二三年の頃の事なり。今昔物語に、その參見のさまをしるして曰く。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

式部がありさま、かゝるめでたき事ども、作り出したる人とも覺えず。裳、唐衣、きたる姿、容體、もてなしなど、いと、あやしう、心もとなげにてぞ、侍りける、云々。

才德、すでに、一世に高けれども、ふかく、自、卑下して、高ぶらず、能ある鷹は爪をかくすとは、げに、紫式部の事なりけり。

紫式部の才德、人にすぐれたれば、上東門院に仕ふるや、ふかく、恩遇を被りぬ。紫式部日記にいはく、

宮（上東門院）の御前も、いとうちとけては見えしとなん思ひしかど、人よりげに、睦じうなりにたるこそと、のたまはするをり／＼はべり。くせ／＼しくやさしだち、はぢられ奉る人にも、そばめたてられで侍らまし。

紫式部は、啻に、つゝしみて仕へたるのみならず、時に、文學の師となりて、教へまつりぬ。紫式部日記にいはく、

宮の御前にて、文集の所々よませ給ひなどして、さるさまのこと、しろしめさせまほしげに、おぼいたりしかば、いと忍びて、人のさふらはぬ、ものゝ閒々

に、おとゞしの夏ごろより、樂府といふ書、二卷をぞ、しどけなく、かうをしへたてきこえさせてはべるも、隱し侍り。

紫式部は博學にして、白氏文集などは、夙によみきはめたるが、上東門院の御學問の志の切なるに感じて、その文集の中の樂府を敎へまつれるなり。その、しどけなしといへるは、例の謙遜したる詞なりけり。

紫式部、もとは、藤式部といへり。そは藤原氏にして、式部なればなり。猶、淸少納言が、淸原氏にして、少納言なりし故、かく、淸少納言の名ありたるが如し。さるに、源氏物語をあらはして、紫を女主人公として、心を注ぎて寫したれば、藤式部のことを、紫式部と渾名したるなり。紫式部日記にいはく、

左衛門の督、あなかしこ、このわたりに、若紫や候ふと、うかゞひ給ふ。

こゝに、若紫といふは、紫式部のことなり。この時、源氏物語、既に殿上に流布して、いたく、もてはやされたれば、かく、物語の中の女主人公の名を以て、直に、紫式部の名としたるなり。

又、紫式部が、日本紀局と呼ばれたることのゆゑよしは、その日記の中につまびらか

なり。曰く、

左衛門の内侍といふ人侍り。あやしう、すゞろに、よからず思ひけるも、え知り侍らぬ、心憂き後言の、多う聞え侍りし。うちのうへ（一條天皇）の、源氏の物語、人に讀せ給ひつゝ、聞しめしけるに、この人は、日本紀をこそよみ給へけれ。誠に、才あるべし、と、の給はせけるを、ふと、推し量りに、いみじうなん、才あると、殿上人などに、いひちらして、日本紀の御局とぞ、つけたりける。いと、をかしくぞ侍る。この故郷の女のまへにてだに、つゝみ侍るものを、さる所にて、さえさがしいで侍らんよ。云々。

紫式部の書は、乙夜の覽にさへ入りて、いたく、もてはやされ、その才名、天下にとどろきわたりたれども、益、謙遜して、つゆ、その能にはこらざりしは、げに、女子の龜鑑なりけり。紫式部日記にいはく、

さまよう、すべて、人はおひらかに、すこし心をきてのどやかに、おちゐぬるを、もとゝしてこそ、ゆゑもよしも、をかしく、うしろやすけれ。

又、いはく、

やゝもせば、腰はなれぬをかり折れかゝりたる歌をよみいで、えもいはぬよしばみごとしても、我かしこに思ひたる人、にくゝも、いとはしくも、おぼえはべるわざなり。

又、いはく、

それを、男だに、才がりぬる人は、いかにぞや。はなやかならずのみ侍るめるよと、やう〳〵人のいふも聞きとめて後、一といふ文字をだに、書きわたし侍らず。いとてづゝにあさましく侍り。讀みし書など、いひけんもの、目にもとどめずなりて、侍りしに、いよ〳〵かゝる事、聞き侍りしかば、いかに、人も傳へ聞きて、にくむらむと、はづかしさに、御屏風のかみにかきたる事をだに、よまぬ顔をし侍りしを、云々。

謙虚靜淑の德、言外にあらはれたり。これらのくだりを讀まむ、紫式部の性質の一斑を伺ふことを得べきなり。紫式部、また、管絃に妙を得たりけり。その歌集をよむに、

さうの琴、しばしと、いひたりける人、まいりて、御手よりえんとある返

事に

露しげき蓬が中の虫のねを朧げにてや人のたづねん

さうの琴の達人なれバ、その傳授を乞はんとするに、紫式部は、自、謙讓して、草中の蟲聲に比したるなど、奥ゆかしきことの限なりけり。

紫式部の美貌は絶世なり。而して、早く夫を失へり。是に於て、思を寄するもの多かりしかど、紫式部は、かたく、その操をまもりたるは、欽慕するに餘あることゝもなり。此時代の才女は、みな、品行をさまらざりしに、紫式部バかりは、如何にして、時の流弊に染まざりけん。げに、たゞ人にはあらざりけり。その歌集をよむに、

かど、叩きわづらひて、かへりにける人のつとめて

よと共にあらき風ふく西の海もいそべに波はよせずとやみし

ど、うらみたりける返事

かへりては思ひしりぬや岩かどにうきてよりける岸の仇浪

紫式部が、苦節を守りたるは、これのみには、あらざりけり。かの御堂關白道長も、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

また、紫式部の才色に迷へり。紫式部日記にいはく、
橋の南なる女郎花の、いみじう盛なるを、一枝をらせ給ひて、几丁のかみより、さし覗かせ給へり。御さまの、いと、はづかしげなるに、我朝顔の思ひしらるれば、これ遲くては、わろからんと、の給はするに、ことづけて、硯のもとによりぬ。

をみなへしさかりの色を見るからに露のわきける身こそしらるれ

あな、疾とはゝゑみて、硯めしいづ。

しら露はわきてもおかじ女郎花心からにや色のそむらん

これ、道長が紫式部に思をよせたるはじめなり。また、いはく、
源氏の物語、おまへにあるを、殿の御覽じて、例のすゞろごとゞも、いできたるついでに、梅の枝にすかれたる紙にかゝせ給へる。

すきものと名にしたてれば見る人のをられで過ぐるはあらじとぞ思ふ

たまはせたれば、

人にまだ折られぬものを誰がとのすきものぞとはくちならしけん

　めざましうときこゆ

これ、道長が思をよせたる二回目なり。また、いはく、

わた殿にねたる夜、戸をたゝく人ありときけど、おそろしさに、おともせで、あかしたる。つとめて、

　よもすがら、水雞よりけになく〳〵ぞまきの戸口にたゝきわびつる

返し、

　たゞならじ戸をかりたゝく水雞ゆゑ明けてはいかに悔しからまし

かく、一度ならず、二度ならず、道長にせまられたれど、遂に肌をけがさずして、その節を遂げたり。あはれ、道長にいたりては、藤原氏は、最、隆盛をきはめぬ。道長は、身は外戚として、天下を掌握し、飛鳥をも落す勢にて、よろづ、意のまゝにならざるはなかりしに、唯、一朶の名花をも手折ることを得ざりけり。これにつけて、紫式部は、謙虚優美なるが中にも、一種磨すべからざる氣象ありて、いさましくも、をゝしくも、げに、古今獨歩の烈女なるを知るべきなり。

紫式部に、二人の子あり。皆女子なり。長女を賢子といへり。大宰大貳高階成章に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

嫁しければ、大貳三位と稱へられぬ。歌に巧にして、才名ありけり。後に後一條院の御乳母となりぬ。次女は、辨局是なり。左衞門督兼隆に嫁しけるが、後に、後冷泉院の御乳母となりぬ。かく、二女とも、かしこくも、萬乘の君の御乳母となりて、共に才名ありしは、紫式部が敎育の素ありしに因らずんばあらず。あはれ、紫式部は、たゞに、早く夫を失ひて、よく、その操を守りたるのみならず。夫に代りて、よく、その子を育てたり。女子の能事、實に、是に於て畢りぬ。げに、紫式部の如きは、万事完備して、秋毫の欠點だになし。世上の女子、之を模範とせむ、虎を描いて、狗に類するの虞はなかるべし。

和珥の童女君

磯城　湏賴國

上代　大泊瀬天皇の皇妃に、和珥の童女君といふがおはせり。春日和珥臣深目が女にて、もとは、釆女だちに宮仕へけるが　天皇、たゞ一夜召し給ひしに、春日大娘皇女を產みまゐらせけり、　天皇疑はせ給ひて、初は、この御子を養はせ給はざりけるに、やがて步りかせ給ふ頭より、　天皇によく似させ給ふと、人みな申しける

より、皇女となし給ひ、すなはち、童女君にあづけ給ひき。童女君、今は、かく皇女をうみて、たとくならせ給ひけれど、聊も、ほこらしき擧動なく、身をくだして、もとの釆女のつらにのみゐ給ひ、人を敬まひ物をあはれび、正しき道をむねとして、かりそめにも、よこしまのことなく、只管皇女にかしづき給ひき。

天皇の元妃がうみまつれるは、白髪皇子と申し、皇太子にたゝせ給へり。亦、つぎの妃、吉備稚媛がうみまつれるは、星川皇子とまをし、腹ぐろく心たけかりければ、天皇、常にゝくませ給ひ、いたつき重らせける時、群臣に詔りたまひて、此の子、朕が世の後に、皇太子をかたぶけまくする事あらむには、汝ら、つとめて太子をたすけまゐらせよと、くれ〳〵もをしへ給ひて、やがて、神ざり給ひき。後、ほどなく、星川皇子の母稚媛、ひそかに星川をすゝめて、高御座に上らまくほりせむ、此の時にこそ、まづ、大藏の宮をとりて、城を搆へ、兵士をあつめよやとありければ、星川皇子その心になりて、用意をさ〳〵おこたりなかりき。童女君、この事を物ごしに聞き給ひしかば、密に皇子のところに行き、稚媛と皇子を諫めて、故の天皇の御言を背きまつりて、太子の位を奪ひ給はゞ、天神地祇のみ怒をかゝぶり、かつ

は、百官達、百性もしたがひまつるまじ。物は、たゞ足る事を知ろしめせ。足るこ
とを知らずぞ、心に飽く事なくて、つひに、大きなるわざはひの端緒となりなむ。此
事、世の人いまだ知らねば、妾も諸神達に誓ひて、人にいはぬゆゑ、只管におぼし
止まらせ給へと、涙ながらにまをさせ給ひき。されど、星川皇子も稚媛も、聞き入
れ給はず。かへりて腹立ちて、童女君を殺さむとし給ひけれど、童女君さわがず、い
とも靜に、手をつかねての給ふやう、わが命は、など惜むべき。たゞ、君のため國
のため、いくへにも思ひとゞまらせ給へと、切に諫め給ひけれど、遂に聞きいれ給
はず、大藏の宮に籠り、戸をさしかため、軍人をまねきあつめて、はしきまゝに、官
物をとりもちうるより、大伴室屋大連、東漢掬直とはかり、軍をもよはして、大藏
をとりかこみ、火をはなちて宮を燒きければ、媛、皇子、みな火焔の中にやけ死に
き。稚媛、此の時、童女君のいひしことはこれなりけりと、泣きくやみて死にきと
いふ。なべて、世の女といふものは、妬の深きものにて、高きも賤しきも、かはり
なきものなれば、畏きあたりにかしづきまつる妃たちの間にも、かたみに、それね
みはあるものぞ、童女君の、たゞに妬のなきのみならず。同じ皇妃なる、稚媛また、

そが腹なる皇子が爲を思うて、己が命をも打ちわすれ、諫め給ひしは、たぐひなく、めでたき御心なりけり。亦、なりあがりては、またり顔に時めきふるまふが常なるに、聊も、さる擧動なく、つゝしみてゐ給ひしは、誠に、女の鑑ともすべき姫にこそ。

漫錄

才女逸話

卑女の文學

山崎庚午

遊女大橋がこと、既に述べたり。今、こゝには、彼の女の遺文を掲げて、讀者の覽に供す。

廣澤記

ことし、延享五、つちのえたつの夏、卯月はじめの七日、長康のねしの、廣澤の莊へまねかせ給ふまゝに、ちよの古道、たどる〱、かの林につく、分入る野もせ、千町ばかりあゆみ行、夏來ても、春のなごりの草の香のどやかに、日影てりそふ、かなたおもてには、主の出むかはせたまひて、待かねさせ給ふなどのたまひつゝ、しりへにしたがひてまかる、西のかたのあみ戸を開き入る、若みどり枝さし

かはすときは木も、や丶しげりあひたるに、つつじやまぶきの花も咲のこりて、さながら、錦をわくるやうなり、池のこなたには、釣臺をすゑさせ給ふ、南のかたにより、亭ひきくつくり、斷口かはほりのやうにまどをつく、これよりながめやれば、小倉山、龜のをの山、花の名におふあらし山、松尾も、みねつゞきにて、夏山のみどりはへたる、野べ青みわたれる、廣澤の池の水鳥のむれゐてあそぶ、おのがさま〲、にはやかなる音を鳴て、行かふも、たゞ繪にかいたらんやうなり、新樹の梢には、蟬の吟をきく、まだしき比なれど、打しきるともなく、しづけさをそふ、かしこには、かけひをもり聞ゆるそほづのおとなひ、山にひゞきくるもいやめづらしく、すべて、耳なれぬ事のみ、我ためにやといとかしこく、まことのしらぬ國に來たらんこゝちす、しばしかほど、こゝにやすらひ、かれいひやうのものたうべ、みきなどもてなさせ給はりて、釣臺のもとへゆき、ながめ殘して、中垣しをり戸に入る、東のかた、いづみの水、こゝろこまやかに、名もなつかしき杜若のさかり、えもいはず、西のかたには、宮城の丶萩すゞきを、まだらにうゑさせ給ふ、今より、秋の千種を、おもひやられていみじ、こゝにぞなのめにかけたる橋ゆゑ、なつかしう、もろこしめきてつくりわたせり、からうたを得ざれど、過し給はじと書しるし給ふ、いよしへ

今の世のはまれあるたれ〳〵も、わたり給ひしと聞傳ふ「いかでかと、つとむねつぶるゝ、はかなきすさびもなくては、ゆるし給はじとて、

　　されどこそながめわたらんことのはも
　　　　などおよぶべき庭のかけはし

と、うちずしてゆけば、せんざいのかけひ、いといたうすゞしくて、みぎはには、紫の雲かとたな引、はふきあまたにかゝれる藤なみさかりなり、左のかたに泰龍とある額をかけさせ給ふ、岩井の水きよらかなり、めぐりは、おのづから苔むせる石のたゝずまひも、なべてならず、庭の上は、色くさをつくして、よしばみたるませをゆひませ、櫻、若楓、木々のもえぎ、うすくこきみどりはへたり、東北にそひて、西南おもてに、たかくひきく作れる槙の木の屋、心ことにしつらひ給ふ、このもかのも見渡すけしき、なか〳〵筆におよばず、よゝのかしこき人々の詠じ給ひし、唐の文、心ばへありてをかしかりぬべきを、書とゞめ、此ろうの床の内、なげしのうへにかけつらね給ふ、南の門を出、東にむかひて田面に出て、山手に行、木立ものふりて世ばなれたる、山は淺きやうなれど深きに似て、口にはうとき鳥どものさへづるも、ことさらびて、所がらあはれにおもしろき事かぎりなし、さかひにのぼれば、五知の山の流れ、鳴瀧の山、そのほか峯あまたみわたさる、それより松、

杉、竹の林に、まかりくだる道しげゝれば、あふさきるさに、行來る所もわすれぬべう、やう〳〵かのろうに上り、ひねもす打かたらひ、酒肴は、海山のめづらしきしな〴〵をととのへさせ、唐のやまとのうつくしきてうどども、かずしらずならべもてなし給はりぬ、まことにかゝるおろかなる身の、をりを得て此莊にかたらひ、おふけなき、此情をいかゞいはせん、言の葉ど、おもひたゆたふほどに、あるじの歌をよみて、聞えさせ給ふ、

廣澤や月見ん秋を契りおかん
　池のこゝろのへだてあらずば

春過ぎて花はちれども柴の戸を
　とふ人からの山のしたかげ

とみにさしいらへもえし侍らで、おこたり侍りぬ、げにかうやうのたへなるところにわたりては、ことのはも及ばじときゝ侍りしも、いまひしとおもひあはされて、いかになどかまねびいでんやうなく、からうじて、つたなきくちずさびに、心うけれど、えはぢあへぬ、かたはしをもらし侍る、

そこひなくすむべき影も廣さはや
　月見ん秋を猶したふなり

よそながら思ひしよりも淺からぬ
　すむ人からの山の下いほ

ながかりつる日も、いつしか入あひの聲、なごりせつなる夕月、ほそくもかさなる青葉をわけてもりくる光、秋の木の間の心づくしに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

もまさりて、庭もまがきも、こよなうあはれふかし、あかずくれゆくたそがれの空の、おぼし〳〵しきに、まいて池の面は打けぶり、ゑんにをかしく月さしうつりたる、いはんかたなし、名だゝる春秋は、なほ、いかならんと、おもふも一かたならず、とかくやすらふうちに、夜もはや子の刻ばかりになりぬれば、立かへらむとす、なごりも例のさらに興じみだれ、たど〳〵しく道のほどもおくらせ給はりけれど、うれしくて、たゞゆめのうきはし、さむれどおもなくわが家につく、

遊女の畫贊　大橋

西になかれ、東にながるゝ、同じ川たけの身にしわる中にも、八重垣つくるを詠じたまひし、神垣のほとりは、いともやさしく、繪にかけるを見てさへ、まことなつかしうおぼゆ、しかはあれど、このふたりのすがた、こゝにかきあらはさゞるさきは、ありやなしや、かゝる卓越せる文辭が、一卑女の手になりしを思へば、豈、驚嘆せざるを得んや。

菅公の母君　（婦人やしなひ草）

菅丞相の御はゝ君は、智惠ことにかしこき人にてましますとかや。及第といふは、儒者の智をみがき、天が下の物しりにそなへしむなる事をいふなり。是、及第狀元といふ。又、落第とて、おほけんする人も、大なる恥辱にする法なり。菅家、すでに及第にのぼり給ふをりしも、御母君、

久堅の月のかつらもをるばかり
　家の風をもふかせてしがな
かく詠じ給ふ。及第にのぼる事を、月宮殿にたとへて、桂の枝をたをらしめて、名をねさせたきとの好事なり。菅家とて、我朝の儒家に、たふとき人となり給ふ。菅丞相は、都良香と云人に儒教をうけ、江家には、匡房、菅家には道眞とて、世にありがたき博識多才の人となれり。すなはち、江家末流も今にあり。中にも、菅家は常盤の松の千とせの色をまし、千里の梅のかうばしき神風や、世々吹つたへて、今、山城國北野の御廟に跡たれます、天滿大自在天神と仰がれさせ給ふも、御丹君の、根によく培ひ、よく養ひたて給ふゆゑなりとぞ。

山名禪高の妻餅を食ひて恥ぢし事、ならびに紫式部鰯の歌の事（婦人やしない草）

山名豊國入道法印禪高の妻、いかなる姓とも、いまだ知らず。ある夜、法印の館へ、ぬす人數十人襲ひ來る。法印鎗をもつて防ぎ、內婦、門のかたはらにかくれ居て、家內にある程の衣服を取出て、ぬす人の太刀尖尾刀にかけたれば、衣にまとわれて、盗人、さらに働きえず。されば、法印利をえて、盗人をしたがへける。ある時、妻餅を喰て、咽の鳴音を聞て、法印、たはむれに、內子は餅をすけるやと申されければ、內子、是をはづかしき事にしし、其後、死しをはるまで餅をくはず。總じて、恥を恥としらざるものは、人倫にあらず。武烈の矢竹心のむくつけなる中にも、かゝる物えんしま

給ふ心なく、流石、まことに、女性のわりなきすさみ、是をおもふに、ある兵書に云、「柔能制」剛とは、之是をいふ歟。紫式部、夫の左衛門佐宣孝の、外へ出たるひまに、鰯といふいををくひけるを、宣孝内へかへり、是を見て、いやしきものをくひ侍るよし笑ひけるを、式部、

日本にはやらせたまふ岩淸水
　まゐらぬ人はあらじとぞ思ふ

かく詠じければ、夫、結句前にいふ詞を耻て覺え侍りける。是よりして、今、女中の鰯をさして、おむらとも、紫ともいふにや。又、或説には、あひよりもよきと言事にて、紫と號くともいへり。去ども、魚のあゆはあゆなり。然るを、藍に取なしいふ事、かなづかひ相違せり。用ふべからず。

義婢

（東隴巷集）

若狹國の家士何某が家婢、十四歳なる者、もと農家の女なり。一日、主人の兒を抱きて、海濱に遊ばせ居ける。折ふし、やま犬の何くよりか來りけん。突然として到り、抱けるところの兒に嚙つかんとす。婢その兒をかばゝんとて、身を以て犬を禦ぎける程に、總身を嚙れ、血まみれになると雖、敢て兒を放さずして抱きたり。やがて、犬は走り去りぬ。婢苦痛を忍びて家に歸り、兒を主人の母に渡し、具に其ありさまを物がたりて、息絶ぬ。これを救はんとすれども、もはや力に及ばず。國の守この事を聞せ給ひ、其義を感じ、これが爲に石碑を建られしと云。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

花ふゞき

塩井雨江

その十

櫻姫が、とてもかくても、たすかるまじうおぼしたる狂風怒濤の、情なき淵を、不思議に救はれ給ひて、何時の代、何處のわたり、いかに尋ねなむとて、又、あひあはむ方も、あひ見む道も、所詮、現の世には、叶はまじう、おぼし歎かれし悲しき賤機にさへ、ふたゝび、夢ならで現にめぐりあはせられ、げに、王土の濱か、蠻荒の邊か、よるべなぎさの、おぼつかなきわたり、名も知らぬ翁夫婦が軒に、頼母しげなる蔭を得たまはむとは、これをかも、げに、思はざりける世のみなりけり。翁は、自、爐にかゝりたる湯沸の水を、あやしげなる桶にうつせば、媼は、かひがひしく、櫻姫はじめ奉り、賤機の汚れたる衣手を、すゝぎなどし、はや〳〵こなたにくつろぎ給へと、助けて爐邊に導き、御衣痛く濡れそぼちておはせど、見させ給ふ苫屋、夫婦が朝夕の鹽なれ衣より、外にものなきを如何にせむ。暫時上なるお

んぞのかぎりをぬぎ給へ、あまりに濡れたれど、嫗がえばりてまゐらせむ。下なるは、さまでおはすまじ。かくておはさば、やがて乾きなむなどいひて、とやしたまへ、かくえたまへなど、いとまめやかに、懇に勞るさま、待ちまうけたる客人に似たり。

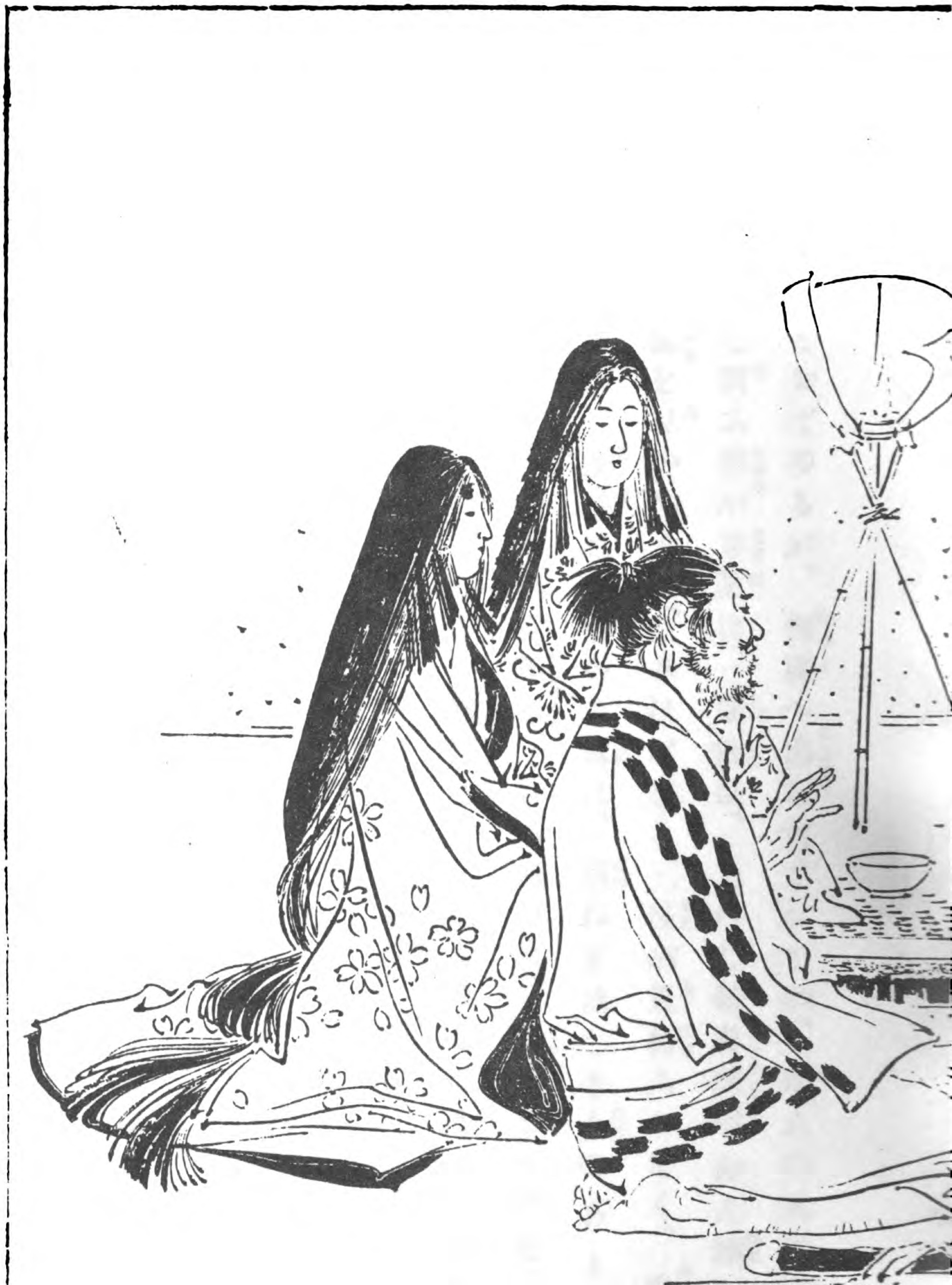
勝機は、やゝ常の心地にかへりけむ。いとうれしげに、夫婦にうちむかひ、思ひがけなきわたりに、いとも有り難き宿をと、恵み賜はることの嬉しさよ。何といはゝや、限りある言の葉に、此の限りなき悦びを、つげまゐらすべき道あらむ。よくよく世に有り難きおん情を、うけたまはるよ。さても、此所は、何と申すわたりにて、侍るや。夢の如き難義の間に、さまよひたれば、更に現の國のやうの心地もおぼえ侍べらずと、えとやかにことゝへど、翁は、はゝと笑みて、げに、さもおぼさむ。なれど、天人の上士にも侍らず。地鬼の下界にも侍らず。こゝもまた、水泡のうたてきたとへになりたる浮世のはてに、うける孤島。淡路の國なる武島といふ漁村。藻屑に馴れ、魚鳳と交るものゝ、あさましき宿りに侍べるはといひて、又、はゝとうち笑ふ。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

上臈たちは、都の御方さまとおぼゆるが、何處へ志したまひてか、けふのしけには遇ひ給ひたる。危うかりきと問ふ翁が言葉に、賤機は、しバし御息所のおん顔をうちまもり、やがて、靜かに翁を見かへりて、されバなり、汝が見給ふごとく、自らたちは、都に住めるものなるが、土佐とやらいふ國に、尋ねまほしき人のありて、はるゞる京をおもひたちたるが、きもなれぬ旅衣、さらぬだに、苦しきものを、尼が崎の假屋にて、船の便を待つ折から、白浪か狼籍者か、心なきしれものゝ爲めに、ゆくりなき難義となり、かてゝ、しなどの神、わだつみの狂風に逢ひ、とても助かるまじき九死の淵になりけるを、此處なる男子の赤心に救はれ、僅に一生を此處に拾ひ、いま又かゝる有り難き御蔭を得るといふは、いかなるゆかりの有職ならむ。あやしきまでに、なつかしきと、あら〱物語る難義の始終。さるにても、かさね〲の大事。御命の恙なかりしは、よく〲めでたき御運に候。何事も命あれぞに候。頼む甲斐なきわたりに候へど、いとひ給はずぞ、こゝろ靜に滯留せられよといひて、翁は、側らの嫗を見かへり、やよ、けふひきたる魚の、かしこにあらむ。魚汁バかりも、つくりてまゐらさずや。ものほしくこそまさめとい

へば、げに、心づきては候へど、さはいへ、からき海人の、あやしき汁など、上臈のおん上には、如何ならむと思ひて、差扣へて侍りしが。さては、作りてまゐらせむかとて、あやしげなる器を、爐に懸け、汚げなる椀を、殊更に清めなどして、をかしげなる饗と、ほゝ笑みて、勸むる心盡しの魚汁。御息所は、唯、忝なしとうちまもり給ひしのみ。賤機は、こゝろざしは、上もなう有り難かれど、なほ、波間に漂泊ふ心地すれど、絶えてものほしかる心なければとて、僅に取り上げたるのみにて、うちおけど、ありつる水師は、獨、幾度か椀を傾けつゝ、肴に向ひ、魚汁の談より、いつしか、難波、築紫、浦々のはなしに餘念なし。

夜も、いたう更けゆけど、娼は、奥なる小やかなる一間の、取り散らしたるを、俄かにかたづけ、隔の襖もあらねば、立しとみやうのものゝ、煤げたるを取り出でゝ、御息所賤機のために、わづかに形ちばかりの臥床をしつらへ、夫婦のものは、水師と共に、なほ、しぞし爐を圍みて、四方八方のもの語りしたるが、いつしか、ひぢを枕に寢入れど、磯うつ波の音のみ、いやましに物凄く、たえだえ聞きなれぬ水鳥の聲、似るものもなくすさまじ。

御息所は、ことわりや、おん心地の、いみじう煩しけれど、賤機の膝を、おん枕にせさせ給うて、ものも仰せ給はず。賤機も、又、なやみの唯ならねど、姫あるが嬉れしさに、僅に苦痛を忘るらむ。姫のおん脊なを、静かにさすりまゐらせつゝ、主人も情ありげに、水師も、まめなるものゝやう侍れバ、頼みなバ、杖とも柱とも成りも呉れ候はむとおぼゆるに、御心やすくおはしてよ。さらずとも、親らの、かくて候得バ、何事もおぼし歎きなせられぞなど、慰めまゐらすとすれど、姫は、武文が最期など仰せ出で給ひては、泣きなどしたまへど、賤機も、流石に思ひ出づれバ、涙なき能はず。幼き時にわかれたれど、母そばの母といふものは、其面影だも覚えず。いま又、父のみの父なる武文は、尼ケ崎の浦わに、かへらぬ波と砕けて、また見るときもあらずなりぬ。わがために、天とも地とも、頼むなる君は、御運つたなくて、こし方は、霧に嵐に晴れまなきおん世の有りさま。行末は、又いかなる時雨ならひなど思ひ迷へど、いとはしく、悲しくなりて、涙は、はしなくあふれむとするを、袖に包みて、一雫もこぼさず。なほ、かにかくと慰めまゐらするに、姫はおんなやみの、いやましに重く、燃ゆるばかりの熱氣ながら、おん身の、頻りに振る

はせ給へバ、賤機は、親ら上なる衣を取りて、姫のおん衣の上に重ねまつり、心に深く神力を念じ、佛德を祈りつゝ、介抱に心骨をつくせど、姫のみけしきは、いよいよ惡しく、曉ばかり、はやこれを限りに成らせ給はむかと見ゆるに、翁夫婦も高きさやぎ、賤機は、唯、姫よ御息所よと、抱きまつりて、泣くのみ。秋風頻りに、客窓の孤松に鳴き、水波また寒江の殘柳にむせびてやます。

文林

霞添山色　　近衞　忠凞

朝がすみなびくにつけてやま松の
　みどりも春のいろやそふらむ

毛利　元德

今朝みれバ雪にやつれし山のはを
　春にかへしてたつかすみかな

鍋島　直大

うすがすみかゝるを見れバ白雪の
　つもれる山ものどけかりけり

前田　利嗣

草も木もまだもえいでぬ山なれど
　春を見するはかすみなりけり

津軽　承昭

雪のてるとは山まゆも打ちかすみ
　たしかに春のいろを見せけり
松浦　詮

雪のいろも今朝はかすみて梓ゆみ
　はるを見せたるふじの芝やま
長岡　護美

花はまだにほひそめねどみ吉野の
　やまのどかにもかすむ春かな
前田　利鬯

山の端はなべてみどりの春の色を
　さらに添へたる朝かすみかな
高崎　正風

いづくより立くる春か知らねども
　遠やまの端ぞまづかすみける
水野　忠敬

春がすみ立そめしよりのどかにも
　いろこそそへれ秩父甲斐がね
前田　利昭

隅田川さくらはいまだ咲かねども
　かすみにけりなをつく波の山
宮地　厳夫

むらぎもの雪にやつれし山のはを
　春にかへしてかすみたなびく
小出　粲

きゝす鳴く野路の芝山うちけぶり
　枯生もにほふあさがすみかな
坂　正臣

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

咲きいでむ花のおもかげ匂はせて
ひむがし山に立つかすみかな　植松有經

朝ゆふに見なれし山もはるがすみ
たなびく時はなつかしきかな　大口鯛二

朝がすみたなびきそめつ消え殘る
たかねの雪もはるやしるらむ　鎌田正夫

冬がれの野ずゑの山もうちかすみ
春のみどりになりにけるかな　千葉胤明

大空はみどりに晴れてひとむらの
かすみぞのこるやま松の上に

須磨の浦にてよめる　諏訪忠元

須磨の浦やよせては返す波のねも
こゝろを洗ふよすがとぞきく

山春雪　石丸忠胤

春といへどはるの姿も見えざりき
ゆきのみのこる越のしらやま

都春風　松本道別

八千またの大路こう路に打なびく
はたにぞ春のかせはしらるゝ

路添山色　近衛貞子

春がすみたてるを見れど動きなき
山のすがたもかはりけるかな

しら雪のつもれる山もきのふけふ　鍋島榮子

春をバ見せてたつかすみかな　蜂須賀随子

春がすみたちそめしより山の端の
ゆきも花かとうたがはれぬる　前田朗子

梅さくらにほはぬ山もたちわたる
かすみぞ春のいろを見せつる　柳原愛子

うらうらとのぼる日影も霞みつゝ
のどかにみゆるときはの山のは　保科節子

さしのぼる日影かすみて大そらに
くれなゐ匂ふ富士のしらゆき　小池道子

霞たつあしたに見ればときはやま
まつのみどりも春はありけり　北島以登子

山松のすがたはそれと見えながら
峯にも尾にもかすみたなびく　鳥尾廣子

若なつむ野は寒けれどうちわたす
やまはのどかにかすむ春かな　小笠原艶子

吹きおろす風まださむき山のはを
のどかに見せてたつかすみ哉　保科寧子

とことはにみどり變らぬ松やまも
かすみたなびき春めきにけり

高崎　竹子

ゑたくみも筆すてつべくみゆる哉
かすみ初めたる春のとはやま
原田　民子

嶺に尾にのどけきはるの色そへて
かすみたなびく遠のやまやま
鶴　久子

青やぎのかつらぎ山もはるの色に
なびきそめぬる朝がすみかな
服部　磯子

足びきの遠やまのはの春のいろに
ひかりを添てかすみたなびく
三島　竹子

少女子のころもの色にそめまほし
かすみたなびく山のけしきを

鶯告春
何　たに子

ふく風はまだ寒けれどうぐひすの
聲にこゝろははるめきにけり

春夕
三輪田眞佐子

田鶴のゐる小松が原のゆふがすみ
くるゝも惜しき春のいろかな

海邊興
海上　喜子

海幸はありもあらずもおもふどち
うらびとさびて網ひきてまし

水上霞
園生　鶴子

水どりのすだく洲さきのあし原の
もゆるけぶりや霞なるらむ

故鄕早梅
園生　清子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うぐひすもまだしら雪のふる里に
　かすみもあへずにほふ梅かな

女子の本分とふ書をある人の
　賜はりけるに　　園生たつ子

村肝のこゝろをみがくたまものは
　身のひかりとぞ成ぬべらなる

九連城の新年　　森　馬太

國の光の日の御旗　門松が枝になびくなり
大御代ほぎのいはひ歌　城の内外に聲高し
なべて積れる白雪の　こほりの山路ふみ分て
十文字にあゆむ軍人　ふる年よりぞ勇ましき
燒酎ひさぐ支那人も　餅いひ賣れる朝鮮人も
羨やましげに打見やる　九連城のちまたかな
今日こそ歌へいくさ人　年の始のいはひ歌
柏手打てゞ諸共に　いなゝく馬の聲ぞする

迎春　　三輪義方

ふるき慣の、猶、すたれぬ家にやあらん。昨夜、儺やらふ聲の、聞えしに、明日は、春立つ日なりけりとはしりぬ。まことや、立つといふばかりにて、山も霞みて、雪の色さへ、ほのかに、打匂へるもをかし。野べの枯生も、そこはかとなく、青めるやうなるは、下より萌す氣の、色に出るなるべし。籬に囀る鳥の聲、大路行く車の音の、花やかに、聞ゆるも、思ひなしのみにはあらじ。あはれ、心ゆくものは、春まちえたる、あしたのけしきなりけり。なほ、火桶のもとは、離れぬものか

ら、心も、のびらかなるまゝに、山里の梅やいかならん。今日は、ふるき暦の、正月七日八日の頃なりといへば、初子は過ぎにたるにや。若菜を、祝ふためしも、この頃ぞかしなど、打思ふも、猶、ふるきを、わすれぬ心よやあらんかし。

若きをとめにつぐ

田邊和氣子

うゑて見よ、花のそだゝぬ里もなし。と昔の人の言のはを、つみとりて見れば、いかでか、花の上のみならむ。教育によりて、人の本性の、まがれるも、直く、曇れるも、清らかに、みがきうるものにしあれど、船のへの、とゞまるきはみ、谷ぐくの、さわたる限、大御恵の、いたらぬくまなく、學校を、たてさせ給ひて、女も、くさ〲の書よみ、種々の、業を學びて、男に、おとらずなり行べく、導かせ給ふは、いともかしこき事なりけり。さかはあれども、諺に、一得一失とやらむ、いへる如く。若き、をとめの、淺はかなる心から、才たかくなれば、いたづらに、心もたかくなりもて行き、女の、つとめとすべきことは、いやしきものゝ、仕わざとのみ、思ひひがめて、終日につくゑに向ひ、書よみものかきなどしつゝ、一生を過さんと、思ふ人なきにしもあらざるべし。あはれ、かけまくもかしこき大御心、いかでかさあらむ。かの、小楠公の母ぎみ、松下禪尼などの如く、ならしめむとてこそ、あまねく女德をみがゝしめ給ふにはあらめ。はた、かの式部がものせられし、雨

夜の、品さだめにも、女の心ざま、高き、いやしき、とり〴〵なるよし、いひもてゆきて、はては、めやすきかたをこそ、つひのよるべとは定めたれ。されど、學びえし、種々の書どもを、心のたねとし、土かひ、水そゝぎ、おのれをかへり見いつきつゝ、朝に、夕べに、まめ〳〵しく、舅、姑につかへ、裁縫、其外、くり屋の業も、みづから下りたち、いそしみ勤め、子を敎へ導くにも、庭のをしへに心を用ゐ給はずは、をしへ草、花も、實もなく、匂ひもなくて、いつしか家も、おとろへゆかん。されば、「心からこそ、身はいやしけれ」と、人もみるらむかし。

庭の梅

臼井ふく子

菅公が、みにはの梅の、ありつる花の、かをりは、末はるかなる、今日も、なほ東風ふく毎に、わすられず、世に忍ばれ、また、貫之の宿なりける、梅の花の、なつかしきゆかりは、今もなほ、鶯のこゑと、ともに、宮古にも、鄙にも、ゆかしきものとなりて、殘りぬ、おなじ延喜の春に、おなじ色に咲きにしものは、さはにありけむ、變らぬ天暦の都に、かはらぬ香に、匂ひしものも多かりけむを、かれは雨風にくちはてぬ、これのみは、天地と、共につたはりぬ、これは淸き菅公の、こゝろにめでられ、やさしき紅梅の內侍に、いとほしまれたるが故のみ、かれは、さる方の主なかりしが故のみ、あはれ昨日けふ、匂ふわが宿のうめ、な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れもいたづらに、くちなむものか、あはれやな、わが身世にさるべきかたなりせバ、月にもたとへ、雪にもよそへ、うたひもし、詠みもしまねかぬも人にとはれ、待ぬも鳥のおとづれむものを、あたら花も香もありながら、いろもゆかりも、あらぬわれを、あるじとなしたれバや、埋れながら朽ちむとするか、汝もまことに、幸なきものなりけりと、思ふにつけて、思ひしほれて、ひとりながめわたせるをりしも、おとなひこしは、日ごろいとしたしき友なりけり、あなうれしや、此友なれバこそ、此あさけ、此宿に、此花をしも、とひこしてにあらむ、あはれ此友がためには、いかで一枝をも、をしむまじものなど、思ひつゝ、いざたまへとてむかふれバ、中垣のほとりに近くさしよりて、おちこちの家々の梅も、大方はほころびぬ、おとにきく臥龍梅などこそ、又一入ならめとて、母なる人の、つれ立たむと、おほせらるれバ、さらぬ和君をも、さそひてと思ひて、からはまゐり侍りぬと、思ひがけなき友の言の葉に、あさましくなりて、いらへをもえせず、唯うち守りたり、などさはうちながめのみしたまふ、父母もまちつらむに、事はさしおき給ひて、とく來たまひてよ、いよ／＼あさましき心地になりて、思はず、あなつねならず、こゝろなの言やと、つぶやきぬ、心あれぞこそさそひもまゐらしゝものを、さ、のたまふ御身のみこゝろこそ、なか／＼に心なとは申しはべらめ、とまれかくまれ、とくたまへ、日來よかる友の誘ふに、とくたまはずやなどしきりに

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

すゝめけれど

　われをのみあるじとたのむ庭のうめ
　　おきていづちの花をたづねむ

としるして見すれバ、友も、今更よ、軒のつまなる梢をバ仰ぎしが、如何なるつゆか、こぼれにけむ、如何なるかをりかさそひけむ、頰のあたり、あかく、くれなゐにそめなしたるこそ、をかしかりしか。

雜報

●高等女學校規程　今度、文部省には、女子教育の普及を計る方針を以て、高等女學校の規程を發布したれど、左に掲げて、諸姉の參考に供ふ。

高等女學校規程

第一條　高等女學校の學科目は修身、國語、外國語、歷史、地理、數學、理科、家事、裁縫、習字、圖畫、音樂、體操とす又隨意科目として敎育、漢文、手藝の一科目若くは數科目を加ふることを得

外國語、圖畫、音樂は府縣立學校に就きては文部大臣の許可を受け其の他の學校に就きては地方長官の許可を受けて之を缺くことを得又生徒の志望に依り之を課せざることを得

第二條　高等女學校の修業年限は六箇年とす但土地の情況に依り一箇年を伸縮することを得

第三條　高等女學校の第一年級に入るべき者は修業年限四箇年の尋常小學校の卒業生若くは之と同等の學力を有する者とす

第四條　入學生徒の資格を高むるに從ひ第二條の修業年限を三箇年までに短縮することを得

第五條　敎授日數は每年大約四十週敎授時數は每週大約三十時とす

第六條　高等女學校の學科目の程度は左の如し

一　修身

敎育に關する勅語の旨趣に基きて人道實踐の方法を授け兼ねて作法を授く

修身を授くるには躬行實踐を旨とし務めて貞淑の德を養ひ起居言語其の宜きに適せしめんことを要す

二　國語

初めは普通の漢字交り文を講讀せしめ漸く中古以降の平易にして雅馴なる文章及歌に及ほし又日用書類記事文等を作らしめ兼ねて文法の大要を授く

國語を授くるには發音及句讀に注意し讀方話方に習熟せしめ文章を作らしむるには簡明着實にして達意を旨とし文題は務めて實用に適するものを撰び文法は講讀作文敎授の際其の他便宜の場合に於て之を授くべし

三　外國語

讀方譯解習字書取會話文法及作文を授け普通の文章を讀み及簡易なる會話及通信等を爲すことを得しむべし

外國語を授くるには常に其の發音を正しくし及文法に注意せしめんことを要す

四　歷史

本邦建國の體制　皇統の無窮　歷代天皇の盛業忠孝貞淑の事蹟學術技藝の隆替風俗の變遷等に關する事項を授け兼ねて外國歷史の大要を授く

歷史を授くるには我國體を明かにして以て國民たる志操を養成せんことを務むべし

五　地理

鄕土の地理より初め漸く之を擴めて畿內八道の地理及本邦と重要の關係ある諸外國の地理を授け傍ら地文の大要を附說す

地理を授くるには人生に適切なる事項を知らしむるを旨とし地文に於ては成るべく本邦の事實に依るへし

六　數學

筆算に依りて整數分數小數の加減乘除並比例百分算を授け兼ねて珠算に依りて加減乘除を授く又開平開立の一端及幾何の初歩を授くることを得

算術を授くるには運算の方法及理由を理會せしめ日常適切の問題に就きて其の應用に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

慣れしめ兼ねて暗算速算に習熟せしむ又農何を授くる際には兼ねて求積法の一端を知らしむべし

七　理科

學校所在の地方に於ける天然物及現象に就きて端緒を開き漸く通常の植物動物鑛物の性質効用等を授け又物理上化學上重要なる事項を授け兼ねて人身生理及衛生の大要を授く

理科を授くるには實地の觀察に基き若くは標本模型圖畫及實驗等に依りて正確なる知識を得しめ日常の生活及生業上に資せしめんことに注意すべし

八　家事

衣食住家計簿記家事衛生育兒其の他一家の整理經濟等に關する事項を授く

家事を授くるには成るべく實習せしめ務めて實用に適せしめんことに注意すへし

九　裁縫

運針法縫方裁方繕方を授く

裁縫を授くるには實用を旨とし其の技能に熟達せしむべし

十　習字

楷書行書草書及假名を授く

習字を授くるには字形端正にして運筆遲滯せさらんことを旨とし且普通文書の書方に習熟せしむべし

十一　圖畫

實物模型手本に就きて自在畫を授く

圖畫を授くるには位置形狀濃淡等其の宜きを得しむるを旨とし時々自己の意匠を用ひて圖案を作らしめ又便宜彩色の法を授くべし

十二　音樂

單音唱歌及複音唱歌を授く又便宜箏曲等を授く

音學を授くるには歌詞樂譜の高雅純正にして教育上裨益あるものに就きて練習せしむべし

十三　體操

普通體操若くは遊戲を授く

體操を授くるには精神を爽快にし身體を健康ならしめんことを務むべし

十四　教育

教育の原則教授の方法等を授く

十五　漢文

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

經史記傳等の內平易にして雅訓なる文章を講讀せしむ

十六　手藝

土地、情況に依り女子に適切なる手藝を授く

第七條　高等女學校に於て生徒卒業の後尙二箇年以內其の學業を補習せしむることを得

第八條　中學校令第十四條第二項に依り高等女學校に技藝專修科を置くときは其の學科は第一條第一項の學科目中一科目若くは數科目を缺き技藝に屬する某科目を加ふるものとす但修身、國語、裁縫は之を缺くことを得ず

第九條　第四條に依り修業年限を短縮せんとするときは文部大臣の許可を受くべし但郡市町村立又は私立學校に就きては地方長官を經由すべし

第十條　高等小學校正敎員免許狀を有する者は高等女學校に於て上の三學年の學級を除き其他の學級の敎員たることを得

第十一條　本令に依らざる學校は高等女學校と稱することを得ず

第十二條　既設の高等女學校は明治二十八年八月三十一日まで本令に依らざることを得

●卒業生　右に掲ぐる如く、文部省は、女子敎育の普及を計り、高等女學校規程ちふものを發布せられたり。吾人は、右の規程の、能く完備ひて至れるを悅び、亦、文部の新大臣が、文明のすゝむにつれて、女子の地位も高まり、從ひて、女子敎育も、亦、その程度をすゝむべしちふ說に贊する者なれバ、右規程につき、兎角の批評はなきも、猶、一言を述べて、文部省、および、女子敎育家の敎誡をあふぎ、亦、注意をも乞はざるべからざる事あり。そは、女學生たちの社會の隱語に、卒業生ちふことの行はるゝ事、これなり。ある人の談話に、諸嬢が、休憩時の折の品評に、誰がしは、よき婿君を持ち給ひて幸福なり。吳がしは、かの、やさ君の文學士と結婚ひ給ひ、手をとりて、昨日より、新婚旅行にいで立ち給ひし事の羨ましさよなど、噂とりどりなる中に、かの人は卒業生なれど、あらず。など、卒業生ちふ言の、まゝ〳〵耳にする事ありと語れり。さて、その卒業生とは、何のゆ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゐるかを尋ぬるに、諸孃が、高等の學校に入りて、學の窓に、螢雪の年月を積むうちには、普通の容色をそなへ、普通の女子の心を持ちたるものならむには、良緣ありて、やがて、卒業の曉を待たず、男子に嫁ぐものなり。さはなくて、五年六年の苦學に堪へ、めでたく卒業の證をえ、女敎師ともなりて、獨立の生活をなす者は、所謂、卒業生よとて、諸孃の社會に噂せらるゝ人々にて、その容貌の普通にはづれて醜きより、夫たる人のなきか。あるは、いさゝかの才學を顏にかけて、われぱれの心つよく、妾が郎君たる人は、博士、學士、議員、官吏ならば奏任以上など、夫えりの甚しきより、結婚の時機をあやまりたるか。あるは、西の國風に迷ひて、わが女權の、男子にひとしかるまでは、夫持たじ。妾らは、わが兄弟の爲に、涙をふるひて立ち、あはれ、女權をひろめて、兄弟を、不幸の淵より救ひ出さむこそ、妾らが任務なれなど、すゞろなる事に、心うかせつるやからか。あるは、五體の内足らはぬ所ありて、配遇のならぬより、生涯を獨身にて過ぐさむと、哀なる心根にて、學の道に身をゆだぬるか。何れ、並々ならぬ不具者だかりなりといふ。よりて、卒業生といへど、必、普通ならぬ者をさすにて、いとめでたからぬ意味をふくむなど。吾人は、こゝにて、女子敎育ちふ事に、聊疑問なきあたはず。則、女學校は、感化院、訓啞盲院などの如く、不具者を集めて、敎育する處なるか。はた、敎育によりて、女子を不具者たらしむるか。誠に疑なき能はざるなり。苟、女子敎育にして、忠勇なる國民の慈母たる女子をつくらむとならむ、今少しく、注意ありて、完全の敎育ありたきものなり。敢て、文部省、および、女子敎育の識者に質す。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

敎の庭

二月五日兼題　小式部内侍

天　長野縣長野町　高野辰子

なかなかにいく野の道のふみもみで
君がほまれとなりにけるかな

地　橫濱市長住町　千賀しげ子

大江山いく野のみちのいく千代も
あふぐは君がみやびなりけり

人　東京市三田四國町　師岡千代子

いかでかゝりゆくべきかや迷ひけむ
親にさきだつみちしらずして

ふみも見ぬ人もとのふる大江やま
生野のこゑはきみのほまれか　安井章子

しろかねの出る生野のそのむかし
君かをしへしところとぞ思ふ　安井[illegible]子

（天地人のほかは原稿到着順なり）

文みずていかて知らましきく人に
かへす言葉のあまのはしだて　羽田三緒子

大江山いく野のみちのなかなかに
とはかりしこそ君かさちなれ　城山とき子

大江山ふみ見ずとてもしきしまの
みちは知りけん生れながらに　木下雪江

言の葉のはなのにほひは大江やま
みねより高くよにつたへけり　佐々有鄰子

ふみ見ずとをすのひまもる時鳥
いかにゆかしき初音なりけむ　梶井久子

大江山たかきしらべはふみもみぬ
をみなわらべもめではやす成　奥原ふく子

文も見ぬしづが乙女もしたふかな
しらべもたかき天のはしだて　遊佐とよ子

大江山いく野のみちのいくたびも　ふみ見てしのぶあまのはし立　落合　操子

大江山いくの丶みちのちかくとも　ふみ丶るべしやあまの橋だて　橋本　丹江

敷島のみちふみ見れどは丶そ葉の　木たかき影もたのまざりけん　河合　文子

たれもみなめではやすらむ大江山　生野に丶ほふことのはのはな　吉田　芳子

袖とめていひし言葉にまがひとの　こ丶ろのくもやはれ渡りけん　太田　貞子

幾千代も名はくちせじなしき島の　みちにたけたる大和をとめは　海島　信子

大江山いく野のみちといひかけし　名もかぐはしき大和なでしこ　小原　紅子

大江山やまよりたかくにほはなかな　そでひきとめし君がことの葉　木下　鈴子

大江山いく野のみちのことの葉は　世にしらるべきはじめなり鳧　木下　本子

ふみもみぬ言葉のはなは今もなほ　桂　慶子

大江のやまのたかくかをれり

丹波ぢの大江のやまのたかきより　君がことどは世に知られけり　松尾　勉子

大江山いくの丶みちのことの葉は　そはき代までも傳へけるかな　植木　鋼子

大江山たかきしらへのことの葉は　あふかぬ人や世になかるらむ　永井　さい子

あふぎても見るべかりけり大江山　生野のみちのことのはぐさは　芳野　雪子

大江山みねよりたかくあらはれて　世にかくれなき君がことの葉　密野　荻子

大江山いく野のみちのことの葉は　梅が香よりもなほにほひけり　大橋　てい子

まだふみもみぬ人までもめづる哉　あまの橋だてき丶わたりつ丶　久松　とく子

ふみ見ぬとこたへし君が言の葉を　ふみ見てしのぶ天のはしだて　横山　きみ子

大江山いくの丶みちのいやとほく　すゑの代までも薫ることのは　鈴木　秋子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大江山ふまねどきみがたかきなは　舘脇ます子
こと葉のはなにあらはれに鳬

敷島のきみがこと葉におほえやま　諸井くら子
たかきほまれは世に聞ゑけり

まだふみも見ずとは言へど敷島の　松浦いと子
道にかしこききみぞゆかしき

はぞとほき生野の道はふみ見ねど　池谷蘭子
君かことゝは世にしられけり

生野路はとほしときけど君がため　吾妻ちか子
みまくもほしき天のはしだて

いかばかり嘆き詫けんたらちねの　大谷津琴子
親にさきだつみちをしらずと

大江山たかきしらへのことの葉を　永井さい子
あふがぬ人は世になかるらむ

大江山なのりいでたるうぐひすの　鈴置よし子
はつ音もたかし天のはしだて

大江山いく野のみちのいく代まで　鈴置かう子
ほまれとゞめし君にもある哉

よそにだにきくも悲しき袖ぬれて　小野田のぶ子
親にさきたつことの葉のつゆ

二月作文月次兼題（一）

梅を見て

天　出雲國飯石郡三刀屋村　奥原ふく子

雪消の風いみじうかぐはしきにふと見わたせば垣根に近き老木の梅の三つ二つこゝにかしこにゑみもらせるなりきゆかしくも咲けるものかないでつれ〴〵の友にやせむと一枝手折りて花瓶にさしはさみぬ清きかをり氣高き姿はうち向ふ毎に形さへつゝしまれて讀み行く書もいとすがすがしうぞ覺ゆる實にうるはしき花は多かれどあてやかなる花は澤なれど梅の花の如く香りのいみじうかぐはしく姿の妙に氣高きはあらじかし啻にさるのみならず長閑なる春をも待たずふりつもれるみゆきを冐して其操をかへず咲きいづる心ばへに至りてはいかで比ぶべき花やはある古より花の君子としてめではやされしもげに理りになむさるにつけても今はあてやかなる花にのみ心ひかれて梅の操をめづる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

もの少きぞいとあやしきや

地　　　長野縣長野町　吉田　芳子

なき人の香と昔の人のめでけむ梅の花ばかりめでたきものはなかりけり八重なす霞のおくに匂ひ出でゝは風を便りに人をまねぎ賤がかきねに咲き出でゝては人目をとゞむるせき屋となりぬ

そも〳〵此梅よかくうるはしき花をもちて人にめでられかぐはしき匂をはなちて人に賞せらるゝはさえわたれる霜をしのぎて其操のいよ〳〵正しくふりつもれる雪にたへて其節のます〳〵高きが故なるべしあはれ人も霜雪をしのぎ艱難にたへて後こそ人に尊ばれ人に敬はれ高き位にものぼる幸を得るなれさるを晨に業をはげむも夕は之にうみ夕に志して晨に之をあらたむるの心ならむにはいかでかこの梅の花のごとく世にめではやさるゝ事を得むや

人　　大阪市北區相生町　梶井　久子

うときも人はといひけむもげにことわりとおぼえて此ごろは多くもあらぬ庭の老木の折を忘れず咲きにほふにもひとりながむる事のいとあたらしうてなむあはれ此うめよ嵐にさはらず霜にたわまずさては降り積るみ雪のうちよりかぐはしき香をはなちてさきいづるこそまたなく雄々しけれ木ぶりのたけき枝ざしのこちこちしげなるは雪ふみわけてこまのあら野へいでたちしわがますらをのかたちをまなび散りての後に殘す香はみ國の爲に命をすて名を千年の末にまではせるやまとごゝろにかなひたりそれのみならず春每にわが待つ鶯の初音をさそふたよりとなり小夜ふけて手枕をとへばひとりねの友となりふみ讀む窓に匂ひきては女の道のかゞみともなるべしなど思ひつゞくる間に日はいつしかくれはてゝ山の端いづる月かげのかすみかゝりて枝ごしにはひくるにさらぬだにうるはしき花の色はいよ〳〵はえまさりて此世のものとしもおもひたらずうつくしと見るに吹くとしもなき下風のをり〳〵送るかをりのいひしらず身にしみていとあはれ深き夕べなりまことや古しへより文このむ木とめでられあるじなしとてとかへり

見られけむもたゝに花のうるはしきのみにはあらざるべしいとあがりたる世にもなにがしの卿の此花の宴せさせたまひきときくいかに高きあそびなりけむそのかみのこともしのばれていとゆかしうなむ

鈴木　秋子

わが宿に去年市にてわがなひきて庭にうつしうゑたる梅なんありけるいでや此はるはにほひ清く色めでたく咲き出でゝとひくる友どちにてよなき花よとたゝへられぞやとおもふものから朝な夕な庭におりたちては心のかぎり養ひける程に蕾さへおびたゝしうもちてきのふけふやゝあたゝかなるはる風にうるはしくもゑみはじめぬされど訪ひくる人ごとに是はこよなき花なる哉とめで歌によむもあれど一枝たまひてよと折りゆく人ありて今は枝も殘り少うなりぬあはれ世のひめたちよ妾つらつらかんがふるに世の中のこと大方はかくやあるべき女一たび夫にかしづきて兒をまうけたらんには此梅のごとく養ひて教のみちへみちびくことの大切なる事をなわすれたまひぞ男にせよ女にせよ教つたなければ世のわらはれ草となりていかで進みゆく大御代にかゞはしき名をあげらるべしやこゝろゆるすべからざるは教へのことにこそ妾庭の梅見るたびごとにおもひいでぬるまゝかくはしるすになん

門田八重子

とくより雨風のなやみを受け霜雪にをかされて咲き出でたる梅の今はのどかなる春の日を南に受けたる窓のうちにさゝれて主人の日ごとに文づくゑによりてめでいつくしまるれど梅の花のさかえ此上はあらざらむ梅はいかに心樂しく思ふらんさはあれど其枝幹はもとより斷取られしものにて根の及ぶ所は瓶の底までにして梢の高さも本のまゝ三尺か四尺かより過ぎてのびたつこともなく遂に自由の身を失ないたゞにつかねいましめられたるはこれ梅の大なるなやみにあらずやあないかにせん一の得るあればー一の失あるはたゞに獨り瓶の梅の

みならむや

高野　辰子

昨日今日寒さのとみにゆるびて風も長閑くなりぬれは近きにはころびんなど思ひ居る折しもゐならぬにはひの朝こちにさてはと戸明てながむれど苔むせる幹立よりいさぎよくのせる蘂に白梅の三つ四つ笑みそめたるなん風のまに／＼にはひきにけるそがうれしさに木の本近く立ち出れば數にも似ずいよゝかをりてもし妹もつ男子ならましかばと氣遣ふばかりなりあはれこの梅よ松のたわまぬ操あるにあらず竹のがへぬ色あるにあらずされど三つのうちに數ぞへめでらるゝは霜氷になやまず春とく雪のうちよりかをり出でてその香さへ花さへ實さへよろづにたちまさるのみかはちりての後さへすさめられずて見さえあるは桃櫻などの夜目遠目の麗しきにもをさ／＼劣るまじけれどなりさてこの木ぶりの似たる武夫よ思へば去る文月より天皇の大御心をみ畏てからの夷を正さむと遙に國を立ちしよりさゆる荒野の起きふしもたもとなき身のかたえかんよすがもなく明くれ大砲の烟に天地さへわかぬうちに河なす血しほをふみ越えて御國の爲にはと雄々しくも眞心こめし筒先に國の御稜威の御光は廣き外國の果迄もいよゝてりわりてあふがぬはなきはさながら霜雪のうちより咲き出つる梅に似たりやがて靜まらんには美しき實さへつくべく國の爲め露と消にし同胞は招魂社に崇められちりての後さへ末ながく人の鑑とたゝへ仰かれんされどそのゆかりのかなしみはいかならむ又其なげきやいかならむこをえのべば一日も早く凱旋してとぢめ花やかによき實のなり出てんことのみ願はれてなむ

太田　貞子

ゆるう吹き入る春風のかどはしきに驚かれてふとまどの方をながめけるにきのふありつる梅のつばみのかつ／＼咲き初めたるなりうれしさにゐ堪えで妹にも語りけれどあなうれし姉上けふの日のうらゝに長閑けきを定めてよき言葉もいできなましとく一つ綴りてよとそゝのかさるゝまゝに　吹く

風もまだ袖さむき春のあした南の軒端に匂ひて霜か雪かとまがはるゝよ實に花の君子とよべる言の葉も打ち見るよりやがて思ひ出でらるかし窓のすきまもり來りて夜のまくらに通ふは其香のめでたきのみか男の子の心迄忍やびらるゝわはれ此梅武夫の箙にさゝれし事もありあるはみやびをが我國の梅の花はと歌ひし事もありましてかしこき御内わたりを初め高きいやしき人毎にめではやさるも此花のゆかしく操高きが故ならんさるを花のみならず色さへ實さへ其幹さへとり〳〵めづらかにをかしきこそいょゝあかず慕はしき所なめれど書きやりけれどあはれ姉上わらはも其梅の色香の操のあらまほしくましして一日もはやく學びの窓の明け行きて結ぶ實のいとみづ〳〵しき末のたのしみを待ち侍るになんおど語り合ふ折りしも鶯の二聲三聲鳴きいでたるさすがに菅公の古へも思ひやられてあん

橋本丹江子

ふづくゑのもとにひとり文をひろげて見ぬ世の人を友とすれば心はいとゞ滿まりてわきへの俗塵の内にあるをも忘らずをりしも花うるをのこのゑなんかどにきこえたる見れど水せんあり南てんありその他なにくれとなくあまたあるがなかにえだをたむねたるうめのまだつぼみなるがいともたけたかくまじりたるにるべくもあらねどもとめて花かめにいくもともえだたわめずなんおきけるいつかむゆ日たちぬるうちにえだもたわゝにをれなんむかりにさきみちたりうちに紅梅の一えだ見えたるがあまたきらをつくしたる宮女のそがうちみきさきの立たまへらんがごとくうつくしともうつくしまたいひたらぬ心地ぞするやがて例のごとくまどうちあけふづくゑのもとによりて源氏とりいでてよみもてゆくまに〳〵紅梅のまき紅のいろにとられて香なん白きうめにはおとれるといへるをよみてさなりその香をもてはやす事をぞわすれにたるさては紅梅の色こきにきようしたるまなこも心もうむゝれてけりとおもへばいまさらにいまはまうなりて大みききさきにたらへまつりぬるがおそろ

しうそのえだを地にぬきすてけり香なん今さらに高くわすられぬべくこそおもばえけれそとにあらはれたる色のうつくしきにこゝろうたはれて心のいやしきをしらずその心のけだかきをわすれてそのすがたのみにくきをわらふさしもはづかしきおのが心やすがたのうつくしきはいつかはおところへすてられざらむその時こそは心のけだかき事のあかずわすられね

佐々有鄕子

八重霞立てめたるなかに朧げならぬ匂ひは紅白けんをあらそふとやいふべからん今をさかりの山かげの梅は朝風夕風のかをりはさらなりゆきかふ姿がそでにも袂にもふかきたきものならぬうつり香ははらへどもいよ〳〵深うしみぬるは春日のどけき心の駒のくるうにまかせしかたみなれバゆかしくもまたなづかしくこそ

城山とき子

萬の木どもの中に梅こそいといみじきものなれさるは其の枝ぶりより始めて花の色香までたゞならぬのみならず春さり来れどいち早く萬の花に先き立ちて咲き出で恰も眞心あるもの〻操を守るに似たれはなりおのれ常にこの花を見るたびにこの事に思ひ及びてつく〴〵今の世の人の此の木にだに劣れるを歎かざる事あらず

今日の日和たゞ文机の下にてあだに過しはつへきいかで何某ぬしの園に梅をこそあど友どちにそゝのかされてふたりみたりうち連れ行きぬ花は素衣眞盛りならねどいと〳〵あかぬ風情なり茶たうべなどして例の事いひいでたるに皆さやはなど云ひて笑ひぬ花もし心あらむいかにをかしと思ふらん

鈴置よ志子

春立てどまだ山里はいといたう雪積りて草も木も枯々に埋もりにたるを籬の梅のみひとり雪消のひまより香ひいでたるまたなくあはれなり花はさくらと人々はいふめれど香なきをいかゞはせんそも梅は春の百花に先だちて人の心を喜びしめ雪の色にまじらひて香ぐはしく「東風ふかむ」と心づくしの一ことにとほく君をしたひにけるなどいづれか

あはれならざらん四君子の一として古よりもてはやさるゝもうべなりけり。いでやこのきみを學の友としてその操をきそはでやは。

鈴澄から子

鶯の鳴く音に催されて行くとしもなく柴の折戸を立ち出でぬさすが春のゑるしにやうら〳〵と霞み渡れる空のけしき山のたゞずまひなどをかしきにさと吹き來る東風のえならぬ香のするは誰が袖ふれしかたみぞと心にくきものからやをら籬の許に忍びよりて見るに賤や庭の木梢ども今を盛とさき滿ちて色も香も又なき氣色なりかなたを打見やればまだ年若き女君のいみじうらうたげなるさましてあはれににほへる小染梅の一枝を手をれり折しも程近き竹のしげみに鶯のいとたからう囀りたるもとりわき耳とまる心地して「宿はとゝはゞ」などゑのびやかに打誦しつゝ立去るを彼君いかにきゝとがめ給ふらん。

兼題
- 二月廿日
  - 歌……………歸雁
  - 文……………赤十字社に入社を勸むる文
- 三月五日
  - 歌……………春海邊
  - 文……………うれしきもの

注意

兼題の歌文は、明瞭にゑるされたし。はしりがきかどの見わけ難きは、かいやり捨つべし。

餘芳

いせまうで（二）

坂正臣

星の舍ぬし、

人にさへまさるけものを毛の數の三すぢおとると誰かいひけん」。などよみかはし、御前にをがみて、かの、元寇の難に、いみじく、新なるみいつを、ふるひ給ひし、事など思ひて、かしこみあふぐほど、風のさと吹落ちければ、

この山のまきの葉ならしふく風やもぐりえびすの舟沈めけむ」。さて、いざなはれて、星の舍に立よる。さゝやかなる家の、奥のはなれやにて、淸くはあらねど、いとをかしく、心あるさまにかまへて、前は、五十鈴川に臨み、水をへだてゝ、朝熊山にうちむかへり。花紅葉のながめにも、月雪のけしきにも、あかぬこと無げに見ゆ。所の名物なる、赤ふくといふ餠いだして、あるじせらる。淸原、本田のぬしたちをも驚かして、扇の舍にかへりぬ。

四日、大御神樂を見る。さて後、星の舍ぬしに伴はれて、いすゞの川上さしてゆく。

まづ、林崎文庫にのぼり、櫻の木、多くたてる高き所にいでゝ、川づたひに、細き道をゆくに、山のたゝずまひ、あがれのけしきなど、えもいはず面白し。やゝしばらくゆくに、大きなる石の、川中にさしいでたるあり。これなむ、あはび石とて、人の知れるものなりときゝて、目とゞむるに、げに、色も姿も、まことの物を、うつぶせたらんやうにぞありける、

皇神の御饌のおろしのあはび貝五十鈴川原の岩となりけむ」。あたりの石の上に、ついゐて、煙草くゆらせつゝ、打見るに、あるは、幾仞ともしられぬ大巖の、壁の如くそばだちたるに、蔦かづらのまつはりたる、あるは、削りなしたるごとき岩かどの、雲をしのぎたるに、松の危げに枝たれたる「種しあれば」とよみけむ歌も思はれて、めづらしくも、またおもしろし。川水あまりに清らなれば、浴みまほしくなりて、衣脱ぎて岩のはざまに、いりたつに、快きものから、いとものすごし。なほ、ゆきて、鏡石といふを見る。あれたるほこらありて、その傍にぞ、この石はたてる。かく、名つきたるは、石の質玲瓏として、物の影、さやかにうつる所々あればなりけり。五十年ばかりあなたまでは、すべてに影のうつれりし由、里人はい

へど、今は、大かた苔むしたり。

千早ふる神のかゝみのかたしはもなかぞくもりぬ年のへぬれど」このあたりのさま、はた、いとめでたし。ところ〴〵に、岩の浮みいでたるが、小島のやうに見ゆ。またしぞしゆくに、牛石といふあり。これは、水をはなれて、くさむらの中に臥せる、さながら、かの獸のかたちをなせり。此のあたり、秋草の花、いと多し。旅居の身ながらも、さすがに、餘所に見すぐし難くて、宿の主へおくるべき山ざとにこそとて、手ごとに折る。星の屋ぬし、女郎花を折りて、

そみなへし名をきくだにもうれしきを今日はわが手にならしつるかな」。一人の男は、藤ばかまをとりて、

ふぢをかまわがとりはかむをみなへしいろのゆかりにあはれとや見む」なぞ、はかなき戯言しつゝ、こなたかなたと尋ねめぐり、あまた、折持ち來にける。道を歸りて、扇の舍に入れば、刀自の君、待迎へていはく、今し、家あるじの言ひ置きつるは、かへりたまはゞ、この北の方なる、水月樓といふへ來たまへと、申せとぞ侍りし。とく〳〵とうながさるゝまゝに、三人そこへゆきつれぞ、扇の舍ぬしをは

じめ、松陰のぬし、樫園のをぢ、清原のぬしなど集はれたり。此の樓も、朝熊にむかひ、五十鈴川にのぞみ、風景いみじくよし。さかづき、あまたゝびめぐりてのち、清原ぬし、唐紙とりいで、合作などいふことせよといはる。まづ、松陰のぬし、

あまつかりねざめ〳〵にきこゆなりこよひいくつらわたり來ぬらん」。また、

やまもよし川もまたよしあゆちひとこゝにつどひてあそべるもよし」。かしぞののをぢ、

あしびきのやまのこゝろのたかければ落くる水のきよくもあるかな」。この外のぬしたちも、皆、かゝれつれど、酔ひごゝち苦しくて、うつしとめずぞなりにし。

五日、けふは、いづくへも得出でず。夕つかた、湯あみ所にものしつるに、あやしく異やうなる湯槽のつくりざまにて、快からずおぼえたりき。

六日、大宮に詣づ、時雍館といふ所に、說敎ありときゝて、參入りぬ。前席、河村講義、後席、堀敎正にて、共にたふとくとかれたりき。さて後、御神樂殿に參上る。今日の願主は、みちのくの人どもなりとぞ。八をとめの舞、みやびになつかし。夜になりて、新町といふ所に、花火のうちあげあるよしきゝて、例のぬしたち四五人

して行き見しに、さるけはひもなかりしかど、道の邊の割烹店に入り、酒のみなどして、宿近く歸り來つるほどにぞ、かの花火あぐる音、高々にきこえける。ねたさいとわりなかりき。

七日、天氣もよく、旅居も長くなりぬれバ、今日はいでたつ。扇の屋ぬしを始め、人人門に見おくり、別を惜しまる。更に、外宮を拜み、宮川を渡る。伴へる人、

こんとしはまたもわたらん度會のとよみやがはのきよきながれを」。厄の年のをのこ、

ふたゝびもわたらひ川にわたりあはんちぎりを水にむすびてぞゆく」。齋宮の里に、もちひたうべをるほど、雨ふりいでつ。車なれど、傘さすはづらひもなく、足のけがるゝうれへもあらねど、油紙にて、おほひふたがれたれバ、何のあやめも見えわかず。たゞ、橋の上わたる時のみ、輪のひゞきとゞろくに、こゝは何川ならんなど、心に思ふにも、いぶせくくちをし、晝のおものは、松坂にてたうべ、津に着きしは、また、四時バかりなりしかども、雨のために、心地わろかりければ、やどり定めつ。

八日、雨、なほやまず。またも、いぶせく掩はれたる車にて、いでたつ、油紙の隙間より、道のべの青き草の色のみ、いさゝか見ゆ。午の時過る頃、四日市に着き、晝のものたべ、さて、蒸滊船にのりて、酉の時ばかりに、熱田につきぬ。こゝにも、一夜やどりぬ。

九日、熱田の宮を拜み、例の車にて巳の時過るほどに、家にはつきにけりとなむ。

（完結）

學園

べきは、當然のことなり。恰、是、父母の、正嫡に一家を讓り、其の兄弟姉妹が、之に仕ふるに異ならず。故に、古より、天皇は、臣民を子の如く愛撫し給ひ、臣民も、亦、天皇を父母の如く尊敬し奉り、君臣の間、常に、雍々として和樂し、聊も、非望を企つるもののなきなり。時に汚隆あり。世に盛衰ありて、悖逆の臣現れざることなきにしもあらざれども、天皇の御位は、日月の如く、少しも、變らせ給ふことなし。若、皇位にして支那外國の如く、變らせ給ふことあらむか。臣民は、恰、枝葉の幹根を失ひたるが如く、宗家を失ふことなれば、如何でか、安樂に生活することを得む。必、共に滅びざるを得ざるなり。故に、皇室の爲には、命を捨て、家を顧みず、碎身粉骨して、忠義を盡しゝ人、古來、其の數を知らず。今日、上下共に、太平を歌ひ、枕を高くして、世をのどかに過すは、皆祖先の餘澤なり。されば、今より後の臣民も、亦、祖先の遺風を繼ぎ、益、進みて、忠君愛國の念を盛にせば、啻に皇運を扶翼して、忠良の臣民たるのみならず。天地と共に、無限の幸福を受くることを得べきなり。

從一位　敎長

神代よりみくさのたからつたはりて豊あし原のしるしぞなる

みくさのたからとは、八咫鏡、草薙劍、八坂瓊曲玉にて、三種の神器也。○一首の意は、神代　天照大神の御時より、三種の神器が傳はりてあれば、我が國は、萬古變ることなく、皇位は、天地と共に隆え給ふしるしとなれり。故に、我が國は、世界各國に勝れて、貴きものなることをしるべしとなり。

三種の神器は、天照大神の、天孫瓊々杵尊に、皇位繼承のしるしとて、傳へ給ひ、別けて、八咫鏡の如きは、大神の、親しく御姿を寫させ給ひたるものなれば、天祖の御形見として授け給ひ、此の鏡を見ること、猶吾を見るが如くせよと宣へり。されば、三種の神器は、天祖の御遺體とも云ふべきものなれば、我が國に於いて、是より貴きものなし。是ぞ、正しく、我が國の、我が國たるしるしにはありける。外國の如きは、禪讓放伐と云ひて、強き者起こり、弱きもの滅びて、君主常に變り、人民は、其の時毎に、犧牲に供せられて、塗炭の苦を受く。故に、一方に、勝ちて悦ぶ者あれば、一方には、負けて憂ふる者あり。君臣喜憂を異にし、上下苦樂を同じくせず、我が國の如きは、然らず、樂あれば、君

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

臣共に喜び、苦あれバ、上下互に憂ふ。人心常に輯睦にして、風俗、長に敦厚。君は萬古の君、臣は千載の臣たり。君臣の義明にして、名分の別亂るゝことなく、恰、天地の處を變へざるが如し。是、何の故ぞ、三種の神器あれバなり。神器は、實に、北辰の如し。四方の臣民、是に向ひて、志を變せざるが故に、常に、人心區々に分列することなく、能く、其の目的を同じくして、運動するを以て、敢て、易姓革命の不幸を見ることなく、國體彌強固なり。歌に、豐あし原のまるしとぞなるとは、實に、之を云へるなり。而して、三種の神器の八咫鏡の、淸明にして、能く、善惡邪正を照らす德を備へ、草薙劒は、剛健にして、能く事物を果斷する德を備へ、八坂瓊曲玉は、溫和にして、能く民人を仁愛する德を備ふ。君は、之を以て臣民に臨み給ひ、臣民は、之を以て君に仕へ奉る。是世界各國に比類なき美德なり。されば、我が國の萬邦に卓越せるは、實に、此の三種の神器にありと云ふべし。八咫鏡は、今伊勢の神宮に齋き奉り、草薙劒は、尾張の熱田に鎭め奉り、八坂瓊曲玉は、今、猶、禁中に奉安し給ふ。

平春海

織りいづるこまもろこしのあやはあれどやまとにしきにしくものぞなき

高麗は、今の朝鮮の中の一國にて、古は、我が國の屬國たりしなり。もろこしは、今の支那を指す。○やまとにしきとは、我が國にて、發明して織り出でたる美麗なる織物なり。○一首の意は、織り出だす品物にも、高麗國のもの、支那のもの、或は、外國のものと、種々樣々に珍らしき品物も、多くあれども、我が國にて織り出だす、大和錦と云ふ品物に勝りて美麗なるものは、絶えてなし。恰、此の大和錦の勝れたるが如く、高麗とか、支那とか、西洋とか、海外に種々の國は、多くあれども、神國たる我が日本の如く、勝れたる國はなしとなり。

前にも云へる如く、我が國は、天神の創造し給ひ、其の子孫の正系の御方は、君となりて、之を治め給ひ、其の支統のものは、臣民となりて之に仕へ奉り、君臣の分嚴として立ち、彝倫の道、確として動かず。天下は天下の天下にあらずして、君主一人の天下なり。人民ありて君あるにあらずして、君ありて人民あるなり。故に、君は父母にして、臣は子孫の如し。之を御するに、非道を以てせず、之に仕ふるに、不正を以てせず、忠孝經となり、仁愛緯をなす。上は、下の利を慮り、下

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は、上の益を圖る。上下、常に和樂し、歡聲巷閭に滿つ。恰、彌生の頃、柳櫻をこきまぜて、春の錦をおり出だせるが如し。然るに、高麗、支那などの外國の如きは、かゝる事は、夢想もする所にあらず。古より、易姓革命、或は斃れ、或は興り、或は、他の併呑を受け、或は、兵馬の爲に蹂躪せられ、古來、變遷せしこと幾度ぞや。故に、其の君主として仰ぐ處のものは、祖先の敵なり、臣民として臨む所のものも、亦、往古の仇なり。故に、君に忠せむと欲すれど、祖先に不幸となり、祖先に孝せむと欲すれば、君に敵せざるを得ず。敵と敵と、君臣となり、仇と仇と、上下をなし、以て、一國を組織せるが故に、勢弱の肉は、强の食とならざるを得ざるに至る。此は、高麗、支那のみにあらず、世界各國皆、然らざるはなし。人倫の、尤、重大なる君臣の道、忠孝の綸、絕えて、存する所なし。此の如き國と、我が國と比較せむ、果して如何。啻に、霄壤の差あるのみにあらず。實に、其の優劣を知るに足らむ。まして、山水の明媚、風土の豊饒、氣候の順良、一として、外國の下に出づるものなし。然るに、世には、かゝる美國に生れながら、動もすれば、唯、一向に、外國をのみ羨むもの丶あるは、何ぞや。是、

他なし。維新以來、西洋の文物輸入して、新しく珍らしきが故に、一時、目眩し氣轉し、大和錦の美を忘れて、徒に、彼を以て勝れりと、誤想せし結果なり。滊船、滊車、電信、電話、さては、百般の學術、技藝に至るまで、如何に進歩したりとて、何かあらむ。百萬の兵、數千の軍艦ありとて、何の益をかなさむ。彼の長を取り、我が短を補ふは可なりと雖、彼に心醉して、我を忘るべからず。我が國の人民たるものは、古より、粲爛たる大和錦をして、益、光輝を放たしむることに、心力を盡くすべきなり。

左中將基綱

天地の神のためし御國とてをかしはてたるえみじをも見ず

犯しはてたるとは、外國人が思ふまゝに、我が國を犯して、本意を遂せしことを云ふ。○えみしとは、外國の人をいやしめて云ふことぞ。○一首の意は、我が國は、天神地祇の創造して、修理固成し給ひ、其の子孫、君臣となりて、守護する國なれど、古より、之を犯して、十分に其の本意を遂して、滿足する樣になしえし外國の夷人を見しことなしとなり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

往古、神功皇后は、三韓を征伐して、我が國の屬國となし給ひ、豊臣秀吉は、朝鮮を蹂躪して、明國をさへ驚し、我が國威を海外に輝したることはあれども、未曾て、外夷の爲に、國辱を蒙りしことなし。然れども、外夷の入寇を受けしことは、度々ありき。一條天皇の朝に、高麗入寇して、太宰府鎭兵の爲に打ち退けられ、後一條天皇の朝に、刀夷の賊入寇して、是、亦、敗北して逃げ歸り、南蠻人は、薩摩を犯して大敗せり。龜山天皇の朝より、後宇多天皇の朝に至るまで、蒙古の賊來り犯しゝかども、神風の爲に、戰艦覆沒し、十萬の兵も、生きて歸りしもの、僅に、三人なりき。是より、再來り犯す外夷なし。東洋の一小國にして、此の如く威名赫々たるは、果して、何の故ぞや。是、他なし、我が國は、天神地祇の造りかため給ひし國にして、其の子孫繁殖し、忠勇義烈の國民なるのみならず、天神地祇の威靈、常に、之を守護し給ふを以て、外夷などの、敢て、犯し得る所にあらざればなり。皇位は、既に、天壤無窮なり。いかでか、國家も、亦、然らざらむ。然れども、神靈の冥助は、人力の盡くる後に非れば、なきものなるを以て、人々、忠孝の志をはげまし、心力の及ばむかぎり勤勉せざれば、今

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

後、いかなる變事出で來て、いかなる慘境に陷らむも、計りがたかるべし。是、國民たるもの丶、宜しく、注意すべき所なり。

光嚴天皇

照りくもりさむきあつきも時としてたみまこゝろのやすむまもなし

一首の意は、天つ日の照りつゞくに付けても、或は、雨の降りしきるに付けても、天下の百姓は、冬の寒さ、身にしむころ、或は、夏のあつさ、堪へがたきをり、如何にかあらむ。田畠は如何。或は、疫病流行はせざるか。五穀不熟なるにはあらざるか、衣食乏しくして、寒暑を過すたづきなきものはなきかと、九重の雲の上にまし〳〵ても、常に、臣民の事ばかり思し召して、心の安んずる間もあらせ給はぬとの御歌なり。

天皇陛下は、天祖の正統を受け繼ぎ給ひ、天下を統御ましませど、其の御心を惱まさせ給ふこと、大方ならず。我が國の天皇は、外國の如く、人民ありて、天皇ましますにあらず。天皇まし〳〵て、臣民あるものなれば、臣民は、即、天皇に仕へ奉る爲のものなり。何となれば、天皇ましまさずば臣民なければ

三輪田眞佐子著

女子の本分

全壹册

定價金貳拾五錢也地方は郵送税金六錢也（切手代用は一割增の事）

但國光又は女鑑購讀者各位には定價金の二割引（即金貳拾錢也）を以て發賣可仕候

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　國光社

Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女鑑第七十九號目次

（明治二十四年八月八日內務省許可）
（明治廿五年三月十二日遞信省認可）

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及遞送にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京**新富町**郵便取扱所へ御振込可被下事（郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事●別に領收出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事）未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月貳回五日廿日發行

定價壹册金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿八年二月十三日印刷
同　年同月十四日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所　國光社

（印刷所　東京國光社印刷部）

Digitized by Google